

# 上野国分寺隣接地域発掘調査報告

奈良平安時代の竪穴住居跡等の調査



k 202

G 94.1

13

W

# 上野国分寺隣接地域発掘調査報告

奈良平安時代の竪穴住居跡等の調査

## 序

上野国分寺は上毛三山を望むことのできる上野国のはば中心地群馬県群馬町東国分と一部前橋市元総社町にまたがる本県で第一級の重要遺跡であります。

たまたま関越自動車道が近くを通過するという大規模な開発計画が直接の契機となってこの国分寺の保護対策がたてられ、寺域の公有化に着手したわけであります。該当の地権者の方々には積極的なご協力を得て事業は順調に進行しておりますが、宅地の移転に伴う隣接地の遺跡確認調査を二年次にわたり実施、その結果をまとめたのが本報告書であります。

今回の調査に当って、国分寺地権者会会長住谷隆司氏、東国分区長住谷宗七氏をはじめ地権者各位と直接発掘調査に従事してくださった地元の方々等に感謝を申しあげ、本報告書を上野国分寺をめぐる歴史の新資料として御活用くださるよう念願し、序といたします。

昭和54年3月30日

群馬県教育委員会

教育長 山川 正

## 例　　言

1. 本報告は昭和52年度、53年度の2次にわたって群馬県教育委員会が行なった群馬郡群馬町地内の上野国分寺隣接地の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2. 調査ならびに整理作業は下記のとおり実施した。

### 第一次調査

期　間　昭和52年10月6日～3月31日

調査担当者 井上　唯雄（県教委文化財保護課）

　須田　茂（　　〃　　）

　補助員 内田　憲治（　　〃　　委嘱調査員）

### 第二次調査

期　間　昭和54年1月22日～3月31日

調査担当者 須田　茂

発掘協力者

住谷隆司、住谷宗七、住谷梅香、住谷忠治郎、住谷富太、住谷佳子、住谷芳子、住谷イソエ、住谷サダ、住谷つね子、住谷元子、住谷紀子、住谷幸子、塙田滝雄、塙田幸雄、塙田みさを、塙田シヅ子、塙田光代、塙田トヨ、塙田タツ、塙田千代子、塙田みさは、塙田正行、伊藤モト、大塚みつえ、片山幾子、白井テル、金井もとえ、中島善一、菊地松之助、菊地春夫（以上地元）、神奈川大学考古学研究会 泉谷薰、千藤秀明、西出司、

整理 県教委文化財保護課分室員 浜野和宗作、浅井良子、青木静江、福田由美子、星野かづ子、高橋京子、堤秋子、塙田順子、高橋信子、北堀妙子、渡辺登喜代、坂庭常盤、古松澄枝

3. 本書の執筆分担は下記のとおりである。

I章 森田　秀策

I章 II章 III章第4節 須田　茂

II章第1節 内田　憲治

III章第1、2、3節 IV章 井上　唯雄

4. 採図、図版等の表記は下記のとおりである。

① 遺構の縮尺について、竪穴住居、掘立柱建物は原則として、1/50としたが、一部1/60としたものもある。

② 遺物について、図面は縮尺1%とし、遺物番号は通し番号で表わす。なお、遺物番号に付された記号と文字の意味であるが、土器については、H→土師器、S→須恵器、K→灰釉陶器を表わし、瓦については漢字そのもので記す。

なお、本報告書の作製にあたっては、都丸肇、大江正行、石塙久則をはじめとして群馬県教育委員会文化財保護課の各氏に御教示を得、また、地元の住谷修氏に多大な協力を賜わった。記して謝意を表わす。

## 目 次

I 調査の概要 .....	1
1 調査経過.....	1
2 遺跡の環境.....	2
3 調査の方法.....	3
4 遺構の概要.....	4
II 調査 .....	5
1 A地点の調査.....	5
2 B地点の調査.....	15
3 C地点の調査.....	17
4 D地点の調査.....	18
III 考察 .....	19
1 A 地点.....	19
① 竪穴住居と出土遺物について	
② 国分尼寺の寺域について	
③ その他の遺構	
2 B 地点.....	23
3 C 及びD地点.....	23
4 軒瓦について.....	24
5 文字瓦について.....	27
IV 結 .....	29

## 挿図目次

- 第1図 付近条里推定図
- 第2図 遺跡位置図
- 第3図 調査地点位置図
- 第4図 B・C・D地点トレンチ設定及び遺構概略図
- 第5図 A地点遺構配置図
- 第6~15図 A地点住居実測図
- 第16図 A地点掘立柱建築遺構実測図
- 第17図 A地点拉張Cトレンチ実測図
- 第18図 D地点トレンチ実測図
- 第19~35図 出土遺物実測図
- 第36図 A地点出土土器編年表
- 第37図 上野国分寺軒瓦編年表

## 表

- 1. A地点堅穴住居跡一覧表
- 2. 軒瓦観察一覧表
- 3. 出土土器観察一覧表

## 図版目次

- 1. A地点全景
- 同 遺構全景
- 2. 5号住居
- 6号住居
- 3. 7号住居
- 12a、12b号住居
- 4. 19号住居
- 6号住居カマド
- 5. 7号住居カマド
- 13号住居カマド
- 6. 20号住居カマド
- 7. 19号住居遺物出土状態
- 21号住居遺物出土状態
- 8. 28号住居遺物出土状態
- 掘立柱建築遺構
- 9. B地点全景
- C地点全景
- 10. 2、3、5、6、7号住居遺物
- 11. 9号住居遺物
- 12. 10、11、12号住居遺物
- 13. 16、17、18、19号住居遺物
- 14. 20、21、25、28号住居遺物
- 15. 30、31号住居及びA地点遺物
- 16. A地点遺物
- 17. B地点遺物
- 18. C地点及びD地点遺物

表紙掲載の軒瓦は、上野国分尼寺跡第一次発掘調査（昭和44年度群馬県教育委員会実施）の出土資料であり、その完形復元図である。上野国分寺創建期の軒瓦の組み合わせと考えられる。

## I 調査の概要

### 1 調査経過

上野国分寺（僧寺）は大正15年10月20日に史跡として指定されたが、一部宅地や墓地（金堂跡等）、原野（塔跡）が含まれているものの、大半は農耕地として有名な国府人參等野菜類の栽培が行なわれてきており、現状変更がなされないまま地域の人々によって永く保護保存されてきた。

昭和40年代に入り、国の経済高度成長政策の一貫として関越高速自動車道計画がたてられた。本県では藤岡、高崎、前橋インターチェンジを経て北上し、群馬町東部を縦断し、この地域では上野国分寺の僧寺と尼寺の中間地域を通過する新潟線の基本計画が昭和43年12月に、ついで整備計画が昭和46年6月に発表され、同年8月には正式路線が公けになった。一方、前橋市、高崎市に隣接した当地も住宅適地として急速な開発がみられ、県下でも有数の人口急増地帯になりつつある。

上野国分僧寺については上記のとおり大正期にその寺域が史跡として指定されていたものの、尼寺についてはその範囲が明確でなかったので、昭和44、45年度に群馬県教育委員会が寺域と伽藍配置についての確認調査がなされ、併せて僧寺と尼寺の中間地域（幅3町）の範囲も明確になった。また昭和48年度末には僧寺の寺域北辺を東西に走る町道の拡幅計画が群馬町当局によってたてられ、群馬町教育委員会が寺域確認発掘調査を行なっている。

こうした諸般事情を背景に、大正期以来永く積極的な保護施策がとられていないかった指定地域について県教委の公有地化の計画がたてられ、国庫補助事業として昭和48年度から買上げが開始された。指定面積62,092.69m<sup>2</sup>のうち、48年度4167.36m<sup>2</sup>、49年度5551.85m<sup>2</sup>（住宅1戸を含む）、50年度5688.10m<sup>2</sup>（2戸）、51年度6491.50m<sup>2</sup>（1戸）、52年度6396.22m<sup>2</sup>（3戸）と順調に買上げが進行しており、53年度には50%を越える見込みである。ところが、指定地域内に13戸の民家があり、この住宅地もすべて買収を前提としているため、公有化に併行して移転先の選定が問題となってきた。地権者の何人かの意向は從来の居住地からさほど離れない指定地隣接地及び尼寺隣接地を候補地としてきたため、当該地の発掘調査を実施することとし、調査結果をみて移転の有無については考慮することになった。調査は昭和52、53年度の2年次にわたりて行なわれた。

52年度は昭和52年10月6日から12月23日までA、B、Cの3地点、53年度は昭和54年1月22日から3月31日までD地点を調査した。地番及び調査面積は以下のとおりである。

A地点——	群馬都群馬町東国分字薬師道南190—2	1,200m <sup>2</sup>
B地点——	東国分字村前224	120m <sup>2</sup>
C地点——	引間字石堂246,247	120m <sup>2</sup>

国分寺との位置関係では、A地点は国分尼寺の西隣地、B地点は国分僧寺の東隣地、C及びD地点は国分僧寺の西隣地にあたるものとみられる。

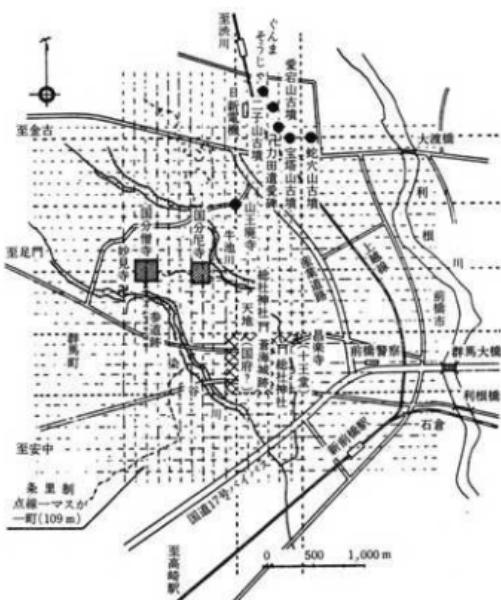
## 2 遺跡の環境

本遺跡は大きくは標高1441mの榛名山東南麓が平坦地に移行する地に所在する。榛名山麓には大小いくつもの河川が山頂から放射状に流路を刻んでいるが、本遺跡はそのうちの二河川つまり、北の牛池川、南の染谷川に挟まれており、その巾約1kmで南東方向にのびる微かな台地に立地する。全体的には南東方向にゆるやかに傾斜しているのであるが、むしろ平坦な感じであり、周囲の起伏も少なく景観は広々としている。標高は125~127m内外である。

つぎに周辺の遺跡環境をみると、本遺跡は推定上野国分寺跡の隣辺に位置しているが、国分寺跡は心々距離ではなく5町を隔てて東に尼寺、西に僧寺を並置していると考えられている。また近辺には縄文時代をはじめとして各時期の遺跡が多いが、代表的なものとしては總社二子山古墳、愛宕山古墳、宝塚山古墳等である。

山古墳、蛇穴山古墳等の古墳、ならびに山王庵寺跡、推定上野国府、總社神社などがあげられる。

これらの遺跡の中には条里を推定させる区画の中に配置されていたのではないかと考えられるものもある。いずれにしろ、それらは後期から終末期にかけて展開した古墳文化や初期仏教文化、律令行政機構に関連する遺跡であって、古代上野国における枢要な地域であり、本地域周辺が古墳時代末期から奈良平安時代にかけて、上野国の文化的、政治宗教的中心地であったことをものがたっている。



挿図Ⅰ 付近条里推定図（松島栄治氏による）



挿図2 位置図

0 1000 2000m

### 3 調査方法

調査にあたっては昭和44年に行なわれた上野国分尼寺発掘調査の際の基準杭を準用した。つまり、その基準杭をもとに10mメッシュで調査地域をカバーすることとし、なお、その南北軸方向は磁北でN-6.5°-Eであった。

A地点では巾1.5mの東西方向トレンチを10m間隔で4本設定（北からA、B、C、Dトレンチと命名）した後、全面発掘を行ない、さらに最終的にその東側地区にトレンチを拡張した（拡

張Bトレンチ及び拡張Cトレンチ)。

B、C、D地点は当初の予定通り(遺構の有無にかかわらず)、トレンチ調査のみにとどめた。

#### 4 遺構の概要

以上のような調査によって検出された遺構は以下のとおりである。

A地点——竪穴住居跡31軒、掘立柱建築遺構1棟 溝6条、土括2基

B地点——竪穴住居跡9軒、溝1条 土括5基

C地点——溝3条

D地点——溝2条、井戸2基

## II 調査

### 1 A 地点の調査

#### (1) 遺構

A地点では全面発掘の結果、竪穴住居跡、掘立柱建築遺構、溝、土塁等の遺構が検出された。

##### a 竪穴住居跡

A地点における竪穴住居は下表のとおりである。

表1 A地点竪穴住居址一覧表

住居 No.	形 状 主軸方向	規 模(m) (東西×南北) 壁 高(cm)	床面積 (m <sup>2</sup> )	か ま ど		内部施設及び出土遺物(数字の単位はcm)	重複関係
				位 置	つ くり 巾(cm)		
1	不整長方形 N-103'-E	3.00×4.20 ~10	11.76	?	?	確認面下への掘り込みが、浅く東南壁は消失 床面も軟弱でかまと跡は確認されなかった。 甃(S) 壁(K)	
2	長方形 N-92'-E	2.90×2.20 25~30	5.56	東壁南寄り	30	南北に溝状の耕作による擾乱を受けている。 床面軟弱。 甃(H) 壁(S)	
3	方 形 N-113'-E	3.00×3.30 ~5	9.12	東壁中央	石、瓦(袖) 40	住居中央南部は床面堅硬、北壁及び西壁は 不明瞭。 蓋(S) 甃(S) 甃(H,S) 壁	
4	長方形 N-100'-E	3.30×4.10 20	12.48	?	?	19住との重複により大部分壊されている。北 東隅にピット2	5 19 4
5	方 形 N-97'-E	4.10×4.10 15~20	15.20	東壁南寄り	石、瓦(袖) 架構石 支 石 45	床面は堅硬、ピット6、南西コーナーに貯蔵 穴状の掘り込み直径70、深さ30cmを確認、か まとどの架構石は軟質の砂岩 羽釜(H) 甃(H,S) 灯明皿(H) 瓦、鉄釘	5 19 4
6	? N-119'-E	? × 2.90 ~10	?	東壁南寄り	石、瓦(袖) 39	20住との重複で大半が消失している。 床面堅硬 羽釜(S) 甃(S,H) 甃(S) 壁	20 6 7
7	方 形 N-85'-E	4.20×4.70 55	20.39	東壁 やや南寄り	石(袖) 53	北西コーナーに90×170の張り出し、かまと 右側に貯蔵穴状の穴60×45、深さ15、柱穴4 床面は堅硬 甃(S) 平瓶(S) 甃(H,S) 壁(H)	20 6 7
9	方 形 N-116'-E	2.80×2.90 20	7.54	東壁南寄り	石、瓦(袖) 48	北西コーナーに貯蔵穴状の穴60×60、深さ10 床は貼床で堅硬。 羽釜(H) 甃(H,K) 壁	9, 11 10
10	方 形 N-116'-E	3.30×3.50 ~15	10.88	東壁 やや南寄り	石、瓦(袖) 45	かまと右側に貯蔵穴状の穴45×45、深さ20 甃(S) 甃(S) 瓦、鉄釘、纺錐車	
11	方 形 N-104'-E	? × 3.90 ~10	?	東壁南寄り	石、瓦(袖) 44	かまと右側に貯蔵穴状の穴45×45、深さ10 甃(H) 甃(H,K) 羽釜(H) 瓦、鉄製品	12 a, 11 17, 10

12 a	方 形 N-125°-E	(3.00×3.10) 20	8.41	東壁南寄り	石(袖) 40	南西コーナーに貯蔵穴状の穴50×50、深さ40 坪(H) 塗(H) 瓦、鉄製品、砥石	<u>12 a</u> <u>12 b</u> <u>11</u> <u>18</u> <u>17</u>
12 b	方 形 N-103°-E	(3.80×4.40) 20	15.17	東壁南寄り		12 a住との重複で大部分塗されている。	<u>12 a</u> <u>12 b</u> <u>11</u> <u>18</u> <u>17</u>
13	? N-98°-E	2.50× ? ~20	?	東 壁	石(袖) 60	住居の大半は調査区域外であり、一部を調査 したのみで全体的に明らかでない。 坪(H)	
14	?	? × 4.20 10	?	?	?	上記に同じ 瓦	<u>14</u> <u>15</u>
15	?	? 5	?	?	?	上記に同じ 瓦	<u>14</u> <u>15</u>
16	?	? × 3.50 15	?	東壁南寄り	石(袖) 50	上記に同じ、かまど付近は床面堅紙 羽釜(H) 塗(H) 瓦、鉄釘	
17	?	? × 3.40 ~ 5	?	東壁南寄り	石(袖) 50	床面堅紙 坪(H) 塗(H)	<u>12 a</u> <u>12 b</u> <u>11</u> <u>18</u> <u>17</u>
18	方 形 N-82°-E	3.80×3.75 20~30	12.60	東壁南寄り	?	床面堅紙、ピット2、東南コーナーを12b住 に切られており、かまどを壊されている。焼 土、灰、袖石と思われるものを検出。 坪(H) 塗(S) 塗(H)	<u>12 a</u> <u>12 b</u> <u>11</u> <u>18</u> <u>17</u>
19	長 方 形 N-104°-E	3.20×4.00 ~20	11.02	東 壁 やや南寄り	40	ピット3、東南コーナー付近にあるピットは 25×25で深さ35、 坪(H, S) 塗(S) 塗(K) 小型窓(K) 瓦	<u>5</u> <u>19</u> <u>4</u>
20	方 形 N-105°-E	3.00×2.80 10	8.99	東 壁 やや南寄り	JL. 石組 架構石 支石 45	全般的に床や軟弱、瓦と石を組合せたかま どで天井部に使われていた軟質の砂岩がく ずれ窓口部を覆っていた 坪(H) 塗(K) JL. 鉄釘	<u>20</u> <u>6</u> <u>7</u>
21	?	? × 3.30 20	?	東壁南寄り	50	床面貼床やや軟弱、かまどの残存も不良で、 住居西部分は調査区域外の為明らかでない 坪(H) 塗(H) 塗(K) 羽釜(S) 砥石、瓦	
22	?	?	?	東壁南寄り	?	掘り込みが浅いことと、耕作による擾乱によ り、かまど部分の所と床面を部分的に確認し たのみ	
23	?	2.80× ? 40	?	?	?	トレンチ調査の為全般的に不明瞭。トレンチ 南壁にかまど左袖の石と焼土を確認	<u>25</u> <u>23</u> <u>24</u>
24	?	?	?	?	?	23住と重複の為北東コーナーのみ確認	<u>25</u> <u>23</u> <u>24</u>
25	?	?	?	東 壁	?	住居東南コーナーと、かまど半分を確認した のみ 坪(H, S) 塗(S) 塗(H, S) 塗(H, S)	<u>25</u> <u>23</u> <u>24</u>
26	方 形 N-83°-E	(4.60×4.80) 40~50	?	東 壁 やや南寄り	石(袖) 35内外	未完掘の為明らかでない	
27	?	? × 3.60 10	?	?	?	上記に同じ 坪(H) 塗(H)	
28	方 形 N-119°-E	2.80×3.20 15~25	7.75	東壁南寄り	石、瓦(袖) ?	床面堅紙 南西コーナーに貯蔵穴状の穴65×55深30 坪(H) 塗(K) 瓦、鉄製品	<u>28</u> <u>29</u>

29	?	?	18~20	?	?	?	未完掘の為明らかでない	<sup>28</sup> <sub>29</sub>
30	?	?	2.20 × ? 20	?	?	?	上記に同じ 甕(H) K	
31	方 形 N-80°-E	3.30×3.70 ~5	?	東 壁 やや南寄り	?	?	1号溝に東壁を切られており、かまど部分については焼土と灰を確認した。床面軟弱。	

※○8住は欠

- 住居の主軸方向は南北線を基準とした。
- 床面積は壁の下端を計り、直みのあるものについては平均的な数値から算出した。
- かまどの巾は袖部の内径を記した。
- 出土遺物については別表があるので概略を記した。
- 遺物のHは土師器、Sは須恵器、Kは灰釉陶器の記号を使用した。

#### b 振立柱建築遺構

2間×2間の純柱の建物である。が、西側柱の中間位置の柱穴は検出されなかった。方2間の建物であるが、プランは南北のほうがやや長い矩形を呈す。東西長は3.75~3.80m、南北長は4.20mである。尺にすれば、東西長は12ないし13尺、その柱間（梁間）は6ないし6.5尺、南北長は14尺、その柱間（桁間）は7尺となろうか。主軸方向はN-4°-Wであって、磁北に近い。柱穴は50~70cmの不整長方形で、深さは現状で40~50cmと割合深い。覆土は火山噴出物（浮石）を多量に含んだ黒褐色土を主体としており、比較的強くしまっていた。

なお、本遺構は3号及び5号竪穴住居跡と重複しているが、本遺構は3号竪穴住居跡に先行するものであることを確認している。

#### C 溝

##### 1号溝

1号竪穴住居跡の西から始まり北へぬける溝である。巾1.5m、深さ60cmの規模で、走向はN-20°-Eである。

##### 2号溝

A地点の北寄りを東西に走る溝である。規模は東側で巾1.5m、深さ30cm、西側で巾3m、深さ50cm（以上）である。走向はN-110°-Eである。溝の横断面の形状はゆるい弧状を呈し、覆土は砂及び水成堆積とみられる粘質土がみられた。

##### 3号溝

拡張Bトレーニチで検出されたもので、2号溝の北側に平行するような位置にある。検出部分が少なく状況は詳しくはつかめないが、2号溝と同様な様相を呈す。

##### 4号溝・5号溝

拡張Cトレーニチで検出されたもので、両者は相似た様相を呈す。

4号溝は上巾3.20m、下巾2.60m、深さ60cmである。巾が広い割に浅い。壁は急で、底部は平坦に近い。覆土は、上層が浮石をやや多量に含むしまりのある暗褐色土、下層が浮石をほとんど含まない粘質の強い暗茶褐色土である。なお、上層の上には残存状態は良好とはいえないが、Bスコリアの堆積がみとめられた。

5号溝は4号溝の東方3mの位置にある。巾3.3m、深さ40cmである。溝の形状、覆土共に4号溝と同様である。

#### d 土 拡

2号溝内西よりの位置で検出されたものである。土拡は2基あったが、1つは径70cmの円形、1つは長180cmの長円形を呈す。深さは共に1m以上に達する。覆土は砂質のしまりのない褐色土であり、覆土には馬骨片が含まれていた。

#### (2) 遺 物

A地点における出土遺物は、土器（土師器 須恵器、灰釉陶器）、瓦、鉄製品、銅錢等である。

##### a 積穴住居跡出土遺物

A地点の遺物は住居跡出土のものが大半を占めていた。以下、住居跡ごとにその様相を記す。（土器については末尾に一覧表をもって詳細を付記する。）

##### 1号住居

###### ① 土 器

須恵器の高台付椀（002-S）、灰釉陶器の皿（011-K）があり、他に灰釉椀があるとみられる。遺物は全て完形のものではなく、覆土出土である。

###### ② 瓦

破片32片が出土した。

##### 2号住居

###### ① 土 器

遺物の出土量は少なく、土師器の壺（004-H）がある他、須恵器壺（003-S）、土師器長胴カメがあるとみられる。なお、004-Hはカマド内より出土したものである。

##### 3号住居

###### ① 土 器

土師器はコの字口縁カメ、須恵器は壺（006-S）、蓋（005-S）、高台付椀（008-S）からなり、土師器壺（007-S）もあるとみられる。

###### ② 瓦

破片11片が出土した。

##### 5号住居

###### ① 土 器

土師器は皿（011-H）、椀（009-H）、羽釜（013-H）、須恵器は高台付椀（010-S）からなり、土師器土釜もあるとみられる。

###### ② 瓦

破片6片が出土した。

###### ③ 鉄 製 品

頭部環状のクギ状鉄製品1点(012)が出土した。巾5~7mm、厚さ2.5~3mmで長さ9.5cmほど  
の角柱をほぼ中央から折り曲げて、頭部を環状に造ったものである。環の内径は1.2cm、現長9  
cmである。出土位置は住居南西隅貯蔵穴内である。

#### 6号住居

##### ① 土器

須恵器の羽釜2点(017-S、018-S)、椀(014-S)、高台付椀(015-S)からなり、土  
師器台付甕とみられるもの(016-H)と土師器高台付椀が含まれるものとみられる。016-H  
はカマド燃焼部に倒置されており、支脚として利用されていたと考えられる。

##### ② 瓦

破片が9点出土したが、この中には文字瓦1点(019)が含まれている。文字は部分破片のため、判読できない。

#### 7号住居

##### ① 土器

土師器は長胴カメ3点(039-H、040-H、041-H)と坏14点があり、坏は型態上、小型浅  
身のもの(020-H、021-H、022-H)、大型浅身のもの(033-H)、大小4種の半球型のもの  
(023-H~030-H)の6種に区別しえる。須恵器は瓶型のもの(035-S)、壺(036-S)、  
平瓶(037-S)、鉢(038-S)、坏(034-S)からなる。カマド内からはカメ、貯蔵穴付近か  
らは坏などが出土している。

#### 9号住居

##### ① 土器

土師器は羽釜2点(051-H、052-H)、椀4点(047-H、048-H、049-H、050-H)、  
高台付椀4点(042-H、043-H、044-H、045-H)、須恵器は高台付椀1点(046-S)から  
なる。なお、他に須恵器の羽釜と椀、灰釉の椀が含まれるとみられる。土器はカマド周辺か  
ら出土するものが多かった。

##### ② 瓦

破片等21点が出土した。この中には「長」と読めるもの(053)と文字不明のもの(054)  
2点がある。053はカマド手前から出土したものである。また軒平瓦の破片が1点出土した  
(055)。この軒平瓦の文様は右偏行唐草文であり、瓦当面厚3.6cm、内区巾1.7cm、上外区巾0.  
3cm、下外区巾0.5cmを計る。界線は形が不明瞭なところがあって、一重界線とみられる部分も  
あるが、全体的には二重界線とみられる。顎は段顎であり、巾2cm、高さ1.7cmである。色調は  
黒青色、胎土は砂粒が多く、粗雑、焼成はやや軟質である。9号住居カマド右袖に使用されて  
いたものであり、また、11号住居出土の軒平瓦と同一個体をなすものである。

#### 10号住居

##### ① 土器

須恵器として坏3(056-S、057-S、058-S)と蓋(059-S)がある。他に土師器コの

字口縁カメ、須恵器壺も含むものとみられる。カマドと貯蔵穴周辺から、須恵器カメ、環、土師器カメなどが出土した。

### ② 瓦

破片15点が出土し、1点の文字瓦(060)を含むが、文字は判読できない。貯蔵穴より出土した。また、瓦片を再加工して紡錘車としたものもあった。

## 11号住居

### ① 土器

土師器は小型カメ(070-H)、羽釜2(071-H、072-H)、環2(062-H、063-H)、椀2(064-H、065-H)、高台付椀2(068-H、069-H)、皿2(061-H、他1)、須恵器高台椀、灰釉は椀(067-K)と皿(066-K)等々があり、他に本住居に付くものか疑問があるが、須恵器の蓋が覆土中にあった。

### ② 瓦

破片は多量で27点出土した。他に軒平瓦破片1点(074)が出土したが、これは9号住居出土のものと同一個体のものであり、カマド左袖に使用されていたものである。

### ③ 鉄製品

横長の板状のもの(073)が1点出土した。両端は丸みがあり、両端近くにはクギ穴とみられる2mm程度の孔がある。端をわずかに損傷しているが、保存状態は良好である。規模は全長8.7cm、巾2.2cm、厚さ1~1.5mmである。薄手のさして大きなものではない。手鎌かとみられる。住居東壁下の出土である。

## 12号住居

### ① 土器

土師器の环(007-H)、椀(076-H)、高台椀(078-H)、皿(075-H)があり、他に土師器羽釜、須恵器高台椀を含むものとみられる。

### ② 瓦

破片17点が出土した。この中には文字瓦1点が含まれる(079)。文字は「八」と読め、ヘラ書きによるもので、一字のみのものとみられる。住居中央部の出土である。また、軒瓦が1点(081)出土しているが、これは小破片であって、文様の全容は不明であるが、既出土のもので本瓦と同型式とみられるものをみると、無子葉八弁の蓮花文、蓮子1+4のものがある。黒青色を呈し、胎土はやや雜であるが、焼成は良好で堅緻である。住居北東よりの覆土中の出土である。

### ③ 鉄製品

刀子が1点出土している(080)。先端部を若干欠損してはいるが、よく原形を保っている。全長22.8cm、刃部長15.5cm、同巾1.8cm、径部長7.3cmを計る。刀身には少量の木質が付着していた。

遺物は以上の他、砥石とみられる石が1点出土した。

なお、12号住居は発掘調査後、遺構は2軒の重複の可能性を考えた（12a・12b号住居とした）が、遺物は分類が困難なため、一括して提示した。

### 13号住居

#### ① 土 器

土師器の环2（082-H、083-H）があるが、これらは大型、小型の二種の形状がある。共にカマド内の出土である。他に覆土より、長胴カメの破片が出土した。

### 14号住居

#### ① 土 器

破片が数点出土したが、保存状態が良好なものはみられない。図示したものは、須恵器高台椀（084-S）である。

#### ② 瓦

破片が14点出土した。この中には、平瓦凹面に蓮花文とみられる范による型押の痕跡がみられるものがあった（086）。文様は単子葉二重線の花弁であって、おそらく上野国分寺跡から多量に出土している軒瓦蓮花文の一類であり、五弁あるいは四弁の蓮花文であろう。この型押の上から布目が付着している。

#### ③ 鉄 製 品

角クギが1点出土した。上部を欠損しているとみられる。現長7cmを計る。

### 16号住居

#### ① 土 器

土師器の羽釜2（091-H、092-H）、椀3（083-H、088-H、089-H）があり、他に土師器高台椀も含むとみられる。

#### ② 瓦

瓦片3点が出土した。

#### ③ 鉄 製 品

角クギが1点出土した（090）。上半部を欠損しており、孤状に彎曲している。

### 17号住居

#### ① 土 器

土師器の長胴カメ（094-H）と环（093-H）の破片2点があり、他に須恵器环があるとみられる。

#### ② 瓦

破片7点が出土している。

### 18号住居

#### ① 土 器

土師器の甕（098-H）、环2（095-H、096-H）、須恵器の蓋（097-S）がある。097-Sは南壁下床面より出土したものである。

## ② 瓦

1点の瓦片が覆土より出土している。

### 19号住居

#### ① 土 器

土師器では、コの字口縁カメ（108-H、109-H）、环2（99-H、100-H）、須恵器は环2（101-S、102-S）、蓋2（103-S、104-S）があり、他に土師器椀、須恵器のカメ、椀（105-S）、高台椀（106-S）、灰釉小瓶（107-K）が含まれるものとみられる。

## ② 瓦

19点の瓦片が出土した。一点の文字瓦（110）があり、「長」と読める。平瓦凸面中央上端部付近にヘラ書きで1字のみ記されてある。住居東南部のビット（貯藏穴か）の脇より出土した。

### 20号住居

#### ① 土 器

土師器の皿（112-H、灰釉の皿（111-K）があり、他に土師器环、高台椀、須恵器高台椀が含まれるものとみられる。

## ② 瓦

29点の瓦片が出土した。文字瓦1点（113）があり、「+」と読める。ヘラ書きである。住居中央西よりの位置の出土である。

#### ③ 鉄 製 品

刀子状のものの刃部破片が1点出土した（114）。現存長8cmのみであり、全体の形状はつかめない。

### 21号住居

#### ① 土 器

土師器では椀（115-H）、高台椀（116-H）、須恵器では羽釜（119-S）、灰釉では皿（117-K）がある。他に土師器皿、須恵器高台椀が含まれるとみられる。

## ② 瓦

14点の破片が出土した。文字瓦が1点出土した（120）。ヘラ書きである。破片のため文字は判読しえないが、数字の20ないし30という意味を表わすものだろうか。住居中央やや南よりの床面から出土した。

#### ③ 砥 石（遺物番号—118）

現存長9.5cmの小ぶりの砥石である。横長で断面は長方形であり、四面とも中央部が弧をえがいて彎曲し、使用状況をうかがわせている（いわゆる手持ち砥である）。凝灰岩で、四面の使用痕が認められる。北壁直下から出土した。

### 22号住居

#### ① 土 器

灰釉高台椀が1点出土した（121-K）。22号住居は住居の形状がよくつかめなかつたのである

が、おそらくは住居南東隅のカマドとおもわれる位置から出土した。

### 23号住居

#### ① 土 器

須恵器高台椀が1点出土している。器形の全容は不明であるが、高台部の形状と胎土・焼成等のつくりは25号住居出土のもの（122—S）に類似したものとみられる。

#### ② 瓦

6点の瓦片が出土している。

### 25号住居

#### ① 土 器

須恵器のカメ（123—S）、高台椀（122—S）がある。他に土師器の土釜、須恵器のカメが含まれるものとみられる。

#### ② 瓦

7点の瓦が出土した。

### 26号住居

#### ① 土 器

土師器では环2（124—H、125—H）、カメ（128—H）、須恵器では环（126—S）、壺（127—S）がある。126—Sは住居中央床面より出土したものである。

### 27号住居

#### ① 土 器

土師器のカメ（130—H）、环（129—H）が出土したのみである。

### 28号住居

#### ① 土 器

土師器の椀（131—H）、灰釉の長頸瓶（132—K）があり、他に土師器高台椀が含まれるものとみられる。132—Kは貯藏穴より出土した。

#### ② 瓦

19点の瓦片が出土したが、文字瓦と軒平瓦1点を含む。文字瓦（134）は「+」と読める。丸瓦凹面にヘラ書きで1字を書いたものである。軒平瓦（135）は瓦当面下半部の残片である。右偏行唐草文で二重界線のものである。色調は黒褐色を呈し、砂礫を多量に含有し、軟質である。なお、134は貯藏穴より出土した。

#### ③ 鉄 製 品

鎌のような形状のもの（133）が出土した。径の部分を若干欠損するが、保存状態は良好である。全長8.9cm、刃部は長6.5cm、最大巾2.0cmである。末端から2.2cmに柄受けがしつらえてある。鎌ないしは鏃のようなものであろうか。住居中央床面の出土である。

### 29号住居

土器は確たるものはない。瓦片が3点出土している。

### 30号住居

#### ① 土器

土師器のコの字口縁カメ2(136-H、137-H)があり、他に土師器椀と須恵器高台椀が出士している。

#### ② 瓦

11点の破片が出土している。文字瓦が1点あり(138)、「山」と読める。ヘラ書きである。

### 31号住居

#### ① 土器

土師器カメ(139-H)を図示したが、他に須恵器のカメ、环、蓋等がある。蓋は口縁端より内側1.3cmの位置にカエリがつく形状のものである。

#### b 壁穴住居跡以外の出土遺物

2号溝及びトレンチで若干の遺物が出土した。トレンチ出土のものは住居や溝等の遺構に付属する可能性があるものもあるが、ここではトレンチごとにまとめて提示する。

### 2号溝

#### ① 瓦

文字瓦2点(140-瓦、141-瓦)と軒平瓦1点(142-瓦)が出土した。

140-瓦は刻印であって、「當」と書かれている。文字はしっかりした楷書体である。縁はタテ、ヨコ、 $2.2 \times 2.4\text{cm}$ の方形である。141-瓦も刻印である。字形は鮮明であるが、文字は判読しえない。縁はタテ、ヨコ、 $1.8 \times 1.9\text{cm}$ の方形である。 $1\text{cm}$ 上部に斜格子の叩き文がある。142-瓦は軒平瓦の破損したものである。完形でないため文様の全容はつかめないが、唐草文の一種とみられる。文様は四葉分がみられるが、それをみる限りでは、文様の走向は左右または均正のいずれでもなく、規律性のみられないものであり、文様のくずれた唐草文といえよう。界線は二重である。瓦当面厚4.3cm、内区巾1.6cm、上外区巾1.9cm、下外区巾1.1cmを計る。色調は淡青色を呈し、胎土は砂礫多く、軟質である。

#### ② 鉄製品

クギ状のものが1点出土した(143)。頭部を円環状にしつらえ、また頭部基部にはクギとは別個体の方形小鉄板(釘座)がある。全長3.9cm、頭部の円環の内径は5.5cm、クギ部の長さは2.7cm、太さは中央部で $3 \times 5\text{mm}$ の角型である。釘座は方1.3cmの小鉄板で各辺中央部に1mmほど切り込みをもち、装飾的なものかとみられる。

#### Aトレンチ

文字瓦1点(144-瓦)、軒平瓦1点(150-瓦)、銅錢1点が着目される遺物である。

144-瓦はヘラ書き文字である。字形は小さく、ややはっきりしないが「生」か「羊」と読むかと考える。150-瓦は右偏行唐草文軒平瓦である。破片であって全容はつかめないが、一返一葉型の唐草文であるとみられる。上下の界線は二重である。瓦当面厚は4.3cm内外、内区巾1.4cm、上外区巾0.4cm、下外区巾0.4cm、脇巾0.5cmを計る。頭は段頭であり、巾3.7cm、高さ2.0cm

を計る。淡褐色を呈し、胎土は細かく、軟質である。銅銭は永樂通宝である。磨滅や腐蝕はみとめられず、文字配列は対読である。背面は無文である。直径は2.5cm、方は0.6cmである。

#### Bトレント

文字瓦1点（145一瓦）と軒平瓦1点（151一瓦）が着目される遺物である。

145一瓦はヘラ書き文字であるが、過半を欠損しているため判読しえない。151一瓦は一返一葉の右偏行唐草文軒平瓦である。界線は一重である。上野国分寺の軒平瓦唐草文の中では流动感は欠けるが、力強く素朴な感じを与える文様である。瓦当面厚5.2cm、内区巾2.5cm、上外区巾0.5cm、下外区巾0.5cm、脇区巾1.2cmである。顎は曲線顎である。灰白色を呈し、胎土は細かく、焼成はやや良好であり、全体につくりはしっかりしている。

#### 拡張Bトレント

文字瓦2点（146一瓦、147一瓦）、軒丸瓦2点（153一瓦、154一瓦）と角クギ1点（148）が出土した。

146一瓦は、「上」と読める。平瓦凸面に記され、その上から繩の叩き目がおおっている。書体はしっかりとおり、ヘラ書きの一文字であろう。147一瓦はヘラ書きであるが、文字の右半分を欠損しているため判読はできない。左半分はのぎ偏であり、「秋」などが該当すると推察される。153一瓦は無子葉二重線五弁文軒丸瓦である。文様構成はやや規格性を欠く。直径15.5~16cm、中房径3.0cm、蓮子1+5、弁区径11.5cm、弁は巾2.4cm、長さ3cm、外区は巾1.5~2.0cmの無文である。色調は赤褐色、胎土は細密、軟質である。背面には布目があり、丸瓦部接着技法は一本造りである。154一瓦は無子葉二重線四弁文軒丸瓦である。簡素であるが、文様構成は規格性がみられる。外区の半分を欠いているが、これは丸瓦と共に欠落したものである。直径約16cm、中房径3.8cm、蓮子4、弁区径12.8cm、弁は巾4.2、長さ3.6cm、外区は巾1cm内外で無文である。黒ずんだ青色を呈し、胎土砂礫が多くやや雜であって、焼成はやや軟質である。背面には布目があり、一本造りによるものとみられる。

#### 拡張Cトレント

銅銭1枚が出土した。皇宋通宝とよめる。文字配列は対読である。背面は無文である。直径2.4cm、方は0.6cmである。

以上の他A地点の26号住居西方5mほどの位置から軒丸瓦が1点出土した。文様は復元推定すると、単子葉二重線五弁文で蓮子1+5となる。規模は直径16cm、中房径3.0cm、弁区径11.4cmである。外区は巾1.5cm内外の無文である。色調は灰青色を呈し、胎土はやや粗であるが、焼成は良好である。背面には布目があり、一本造りとみられる。

## 2 B地点の調査

B地点は推定上野国分僧寺跡の東側に隣接する地であり、20mの間隔をおいて巾1.5m、長さ27mの2本の東西方向トレントを設定した（北をBトレント、南をDトレントと呼称）。

### Bトレント

Bトレントの遺構は、豊穴住居跡7軒、溝1条、土塁2基である。

豊穴住居跡の概要は以下のとおりである。B-1号住居は主軸長3m以上でカマドは未確認、瓦片を出土し、B-2号住居によって切られている。B-2号住居は主軸長4.0mで、カマドは未確認である。B-3号住居は主軸長2.4mでカマドは未確認、瓦片と鉄製紡錘車を出土した。B-4号住居は主軸長4.0mで、東壁にカマドをもつ。B-5号住居は主軸長1.5m以上で、東壁にカマドをもつ。B-6号住居は主軸長3.0mで、東壁にカマドをもつ。B-7号住居は主軸長1.3m以上で、カマドは未確認である。切り合い関係では、B-6号住居がB-5及びB-7号住居を切っている。以上のように7軒の住居をみとめたが、7軒とも同様な構造のものとみられる。つまり、現状からは、2.4~4mほどの小規模で、カマドを東壁南寄りにもつ方(矩)形プランを呈するものと推定される。

溝はBトレントの中ほど東よりに検出された。巾2.1m、深さ60cmで断面Vの字状を呈す。覆土は5cmほどの小石や浮石を含む砂質のしまりのない黒褐色土であり、走向は南北方向である。

土塁はBトレントの西寄りに2基検出された。径1~1.2m、深さ80cmの円形のもので覆土はしまりのない砂質の黒褐色土である。

なお、Bトレントでは西端部で地形に落ち込むような傾向がみとめられたが、僧寺東辺との関連の有無について今後留意したい。

遺物は割合多く出土したが、その中で土器4点、文字瓦4点、鉄製品2点、銅銭1点を図示した。

土器は台付皿(155-S)、高台付椀(156-H、158-H)、椀(157-H)があるが、他に羽釜が多く目立つ。なお、152-Hは本調査中唯一の墨書き土器である。文字は口縁部外面に記されたもので、「正」と読める。

文字瓦は4点出土したが、みなヘラ書きである。159-瓦はしっかりした書体で「千」と書かれている。160-瓦、161-瓦は破損しているため判読しえない。共に行書体のものであるとみられる。162-瓦は一部破損しているが、数字でいうところの「十」であろうか。

鉄製品であるが、まず163は紡錘車である。円盤径は5.2cm、厚さ1.5mm内外である。軸は4mmの角形である。全長は破損しているが、10cm以上である。豊穴住居(2号ないし3号住居)の出土である。164は角クギである。現長7cm、方6~7mmのものである。

銅銭は景德元宝であって、文字配列は右回りである。直径2.4cm、方は0.6cmである。

### Dトレント

Dトレントでは豊穴住居跡2軒(B-8号住居、B-9号住居)、土塁3基が検出された。

住居跡についてみると、B-8号住居は東西長2.5mで東壁にカマドをもつものであり、B-9号住居は東西長2.8mのものである。共に全容は明らかでないが、方形プランで東壁南寄りにカマドをもった小型の豊穴住居と推定される。

土塁は3基みとめられたが、2基は径80cm、深さ30cm、1基は径130cm、深さ40cmである。覆

土はしまりのない砂質の黒褐色土であり、少量の骨片がみとめられた。

遺物は文字瓦1点が着目される。一部欠損しているが、ヘラ書きで三字以上が記されているものとみられる。文字は上2字は「八子」と読めるが、3字目は不明であって、残存の部分からは「南」か「真」などの字形が推測される。

### 3 C 地点の調査

C地点は推定上野国分寺の西隣地南寄りの位置にあたる。調査は巾1.5m、長さ28mの東西方向のトレンチを10m間隔で2本設定して行なった。(Cトレンチ、Dトレンチ)

#### Dトレンチ

溝3条が確認された。南北方向のもの2条、東西方向のもの1条である。南北方向の2条のうち、東側の溝（1号溝）は上巾4.5m、底巾2.1m、深さ1mである。両壁は急で、下底面は平坦に近い。覆土はロームブロックの混入した黒褐色土を主体とする。西側の溝（2号溝）は巾9.6m、深さ2m以上（末完掘のため深さは不明）であって、壁は40°ほどの急な傾斜で落ち込んでいる。断面V字状を程するものと思われる。覆土は大部分砂質のしまりのない浮石を多量に含む黒褐色土であり、下部に若干粘質土が縞状にみとめられた。東西方向の溝（3号溝）は、巾2m、底巾1.3m、深さ1.3mであり、覆土は上層がやや粒子のあらい砂質の黒褐色土、下層がロームブロックを含んだ黒褐色土である。

#### Cトレンチ

Cトレンチでは2本の溝が検出された。これはDトレンチでみられた2本の南北方向溝（1号溝、2号溝）に形状、走向が一致し、連続するものと考えられる。

#### 遺 物

C地点での出土遺物は少量であった。その中から五点を図化した。

まず、D地点からみる。

166は文字瓦の断片である。文字は判読できない。いわゆるヘラ書きであって、平瓦凸面に記されたものである。

167は須恵器杯である。身は浅く、やや底径が大きく、体部にはロクロ痕がみられる。

168は軒丸瓦の断片である。花弁の一部の残片であるので全容は不明である。単子葉二重線五弁文、蓮子1+5のものと推測される。文様は整然としており、上野国分寺の中では優れたものの一つである。焼成も良好である。

169は角クギである。折頭型である。先端部を欠く。頭部長2.2cm、現全長5.7cm、太さ中央部で5×3mmである。

Cトレンチからは170をあげた。欠損部が多いため器形は断定しがたいが、土師器台付甕の台部付近と思われる。底部中央部に径3~4mmの孔がある。穿孔は焼成後とみられる。どのような意図・用途か推察しえない。

#### 4 D 地点の調査

位置はC地点と同様に僧寺西隣地にあたりC地点の北に隣接する。トレンチを計八本設定し、発掘の結果、検出した遺構は北半部で溝一条（D-1号溝）、南半部で溝一条（D-2号溝）、井戸二基である。

D-1号溝はBトレンチ、Cトレンチで確認されたものであり、両トレンチでは溝の規模に相違があるが、位置、走向、覆土、遺物等に共通性がみられることから連続するものと考える。走向は南北方向に近い。壁は急で底部は平坦である。Bトレンチでは上巾3m、下巾2.3m、Cトレンチでは上巾11m、下巾8m深さ1.3mである。遺物は割合多量の瓦と少量の土器片、石製品、砾石、角クギ、銅錢等である。

171は右偏行唐草文軒平瓦の断片である。一返一葉式の唐草であり、界線は二重である。瓦当面厚4.0cm、内区巾1.7cmであり、頭は巾3.6cm、厚さ0.8cmの段頭であり、頭付近に朱の残痕がある。灰白色、砂粒多、焼成やや良好である。

172は四重郭文軒平瓦である。瓦当面厚4.2cm、頭は曲線頭である。頭から平瓦部にかけて朱が付着している。灰白色、砂粒少、焼成良好で堅緻である。なお、平瓦部の技法は凹面の布目を消し、凸面は繩叩き目である。

173は砥石であり、いわゆる置き砥である。細長い石の上面のみを使用しており、その面は凹彎している。石材であるが、白に近い淡緑色を呈し、粒子のやや細かい、堅い石質の砂岩かとみられる。使用面は巾4.5cm、長15cm、であり、高さは8cm前後である。

以上の他に、須恵器の羽蓋や土師器の皿、内耳の鍋等の土器、「元豊通宝」と「元祐通宝」の二種の銅錢、換き臼や墓石などの石製物断片などがある。

D-2号溝は塔跡の西方にあたる位置にあり、東西方向に走るものである。溝の形状はV字状であり、上巾3.8m、下底巾0.8m、深さ1.8mである。壁は割合急であり、掘り込みも深い。水流の形跡はみられない。遺物は割合多量の瓦と少量の土器及び角クギ等がある。

174は文字瓦である。書体は不正確なものであるが、一応「黒」と読んでおきたい。いわゆるへラ書きであって、平瓦凸面に一字のみ記されたものとみられる。

176は文字瓦の断片であり、判読はしえない。

この他にすり鉢や内耳鍋などの土器破片がある。

井戸は2基検出された。1基は径1.5m前後、他の1基は径0.8mのものであり、共に円形の掘り型であって、深さ2m以上を計る。遺物は特にない。覆土はしまりのない黄褐色や黒褐色の砂疊土である。

なお、遺構に伴なわない遺物として、Bトレンチから角クギ4本、Dトレンチから軒丸瓦断片1点（175）がある。175は全容は不明であるが、無子葉八弁文、蓮子1+4のものと推定され、これは081と同型式である。

### III 考 察

#### 1 A 地 点

##### ① 穴住居と出土遺物について

ここで検出された穴住居は31軒である。これらの住居は、主軸方位、住居面積、出土遺物等からみてもそれぞれ特色があり、それらを大きく括ると5つに細類型できる。しかもその分布も全城に分散するものの、後述する国分尼寺の寺域とのからみで、細類型毎にいくつかの特徴を指摘しうる。そこで、その細類型をまず表示すると下のようになる。

類	住居号数	主軸方位	規模(m <sup>2</sup> )
A	7, 26	西偏3°内外	18m <sup>2</sup> 内外
B	2, 17, 18, 27, 31	東偏13°内外	11.7m <sup>2</sup>
C	1, 3, 10, 13, 15, 19, 30	東偏13°付近にまとまり	11.7m <sup>2</sup> 規模にバラツキ
D	6, 9, 12B, 14, 16, 21, 28	東偏23°内外	10.6m <sup>2</sup> 規模にバラツキ
E	5, 11, 20, 22, 23, 25	東偏13°内外	10.8m <sup>2</sup>
不明	4, 12A, 15, 24, 29		

主軸の方位をみると、Aから次第に東偏13°に近いC類へ、D類は東偏する度合が大きくなり、E類に至ってまた東偏13°に近くなる。このN-Sを中心とした動向は西に偏する度合が多いこと、ほぼ500年を周期として東西に変動する振巾をもつこと等が想定されるところから地磁気の方位と関連をもつことは明らかである。<sup>(1)</sup>しかし、その動きがほぼ從来の研究成果に合致する傾向にある。

住居の規模でみるとA→Eにいくに従いやや小規模化する傾向をみることができる。これらは、他の県内遺跡でも認められるところである。<sup>(2)</sup>

遺物の面でみても器制、器形の面からそれぞれの特徴をみとくことができる。それらを抽出すると次のようである。

##### 器 制

	土 師 器	須 恵 器	灰陶陶器	瓦
A	長胴カメ、环	カメ、平瓶、鉢、环		
B	長胴カメ、环	カメ、环、蓋、高台塊		
C	「コ」の字カメ	カメ、环、蓋、塊、高台塊	塊、皿	平
D	羽釜、塊、高台塊、皿	羽釜、环、塊、高台塊	小瓶、塊、皿	平、軒
E	羽釜、土釜、环、塊、高台塊、皿	高台塊	塊、皿	平、軒

## A地点住居跡出土遺物一覧

(回) 数字は個体数であり、また○は確実、◎はやや疑問があるものを表わす。

類	住居番号	土 師 器							須 惠 器							灰釉陶器			瓦		鐵製品		砥				
		長 刷 カ メ	コ の 字 カ メ	小 型 カ メ	羽 釜	土 釜	坏	高 台 施	皿	高 台 施	ツ ボ ・ カ メ	平 瓶	鉢 釜	坏	蓋	塊	高 台 施	皿	高 台 施	瓶	塊	皿	小 丸 ・ 軒 平 瓶	ク そ の 他			
A	7	3					14				2	1	1		1												
	26	1					2				1				1												
B	2	◎					1				◎				◎										??		
	17	1					1																		1?		
	18	1					2									1											
	27	1					1																				
	31	1																									
C	1																	1		◎	1	32					
	3	○					◎									1	1	1						11			
	10	○									○				3	1								15	○		
	13	◎					2																				
	15																										
D	19	2				2	○				○			2	2	1	1			○	19						
	30	1				○	○																	11			
	6						◎							2		1	1							9			
	9				2		4	5						○		○	○			○				21	○		
	12B			○	1	1	1	1															17	○	○		
E	14																								14		
	16				2		3	○																3	○		
	21					1	1							1		○								14			
	28					1	○												1		1	14		19			
	5		1	◎	1	2	1	1	1								1						6	○			
不明	11		1	2	2	2	2	1									○			1	1	27	○	○			
	20			○		○	○										○						29	○			
	22																			1							
	23																○					6					
	25			○					1								1					7					
不 明	4																										
	12A																										
	15																										
	24																										
	29																										

器制的には土師器、須恵器、灰釉陶、瓦の共伴についてみると、灰釉陶が共伴するのはC類以降であり、それに伴なって瓦の伴出もみられるという変化がます目につく。特に、D類以降に瓦が多量に伴出し、住居内への瓦の持ちこみが一般化する。

器形の面でみると、同様な組合せにも微妙な変化がうかがえる。飯炊機能をもつカメの変化でみると、長胴カメ、「コ」の字口縁のカメ、羽釜の変化が認められる。A類とB類の長胴カメの相違は前者が水平に近く開く長胴形で口径に最大径のくる鬼高式の器形をのこすのに対して、後者は削り技法の顕著さ、肩のはった頭部から外側する口縁をもち、胴もつまり、底部は小さい不安定な平底になる。环では、肩に有段の鬼高系のものを含むA類に対し、B類はこれを全く含まない。更に素辺口縁の环でもA類は肩部に棱がのこり深手で大きいのに対し、B類は浅く、小形で棱をのこさない。

須恵器ではA類とB類の最も大きい変化は蓋环の有無である。环の底部は大きい平底でヘラ調整の技法がみられる。蓋は「カエリ」のある小型のものから、端部を直に折り曲げた形の二つが含まれる。これはB類の中における変化として捉えた。

C類になると、カメの「コ」の字口縁の出現が特筆される。脚付のものと不安定な小さい平底のものがある。环は底から体部の折り返しのあと指でおさえた北関東的な技法が認められる。須恵器では蓋环の盛行は続くものの蓋のツマミのリング化、体部の扁平化が進み、环部は底部切り離し技法が糸切り未調整のものが出現し、口径に対する底径が小さくなる傾向が認められる。また一部に、高台碗が出現してくる。灰釉陶の共伴率はまだ低いが、B類に含まれないのに比べて大きな変化である。

D類では、羽釜の出現がある。ツバ部から口縁までが短かく内傾気味で、体部下半はこけで底部は小さい。E類の同器形のものはD類の退化形態としてツバの紐状化、体部のズン胴化がみられる。环では底部が更に小さくなり、全体の器形が小型化し、浅くなる。また口唇部の肥厚傾向が出現する。高台碗の高台部は高く「ハ」の字に開くものと、低く、紐をはりつけたつくりの雑なものの二種がある。特に、灰釉陶が共伴する比率が急増してくるのも大きな変化で、0—53期のものが現われ始める。おそらく、須恵器の座を凌駕するまでにはまだ至っていないが、器種も豊富で、一般の生活の中での有用性が認められていく過程がうかがわれる。

E類では須恵器の出土量が激減し、土師器の小皿（灯明皿）がこの時期を特徴づける。环は更に底部の小型化が進み、体部は直線的に開く。灰釉陶もD類と同様多量に入つて來ていたとみられる。

また、住居内に瓦を持ちこむのはC類以降であることも注目される。これらの瓦は国分寺瓦としては創建期のものでないことも明らかになった。このことは、本類の時期を限定するのに役立つ<sup>(3)</sup>。

以上の変化をA類からE類の5つに細分した。その時期はいつごろに該当せらるかが次の問題である。

E類は他遺跡<sup>(4)</sup>との関連でみると、浅間給源になるB軽石層<sup>(5)</sup>下にあることは明らかであり、

しかも床面と軽石層との間層が極く薄いこともあるって11世紀のものであることはまちがいなからう。

A類は、土器の系譜からみて、鬼高式最末期の様相ともみられるところから7世紀後半のものとみられよう。

C D類の瓦の共伴は国分寺瓦の分類では9世紀のもの<sup>(6)</sup>が主流を占めることからすれば、一応この時期以降のものとして誤りなかろう。

C類の糸切り未調整坏の出現は8世紀終末ごろとみられるから、それ以前のB類へラ調整の坏は8世紀のものとみられる。更に蓋坏の「カエリ」のあるものもこれと同時期のものとみてさしつかえあるまい<sup>(7)</sup>。

羽釜の出現するD類は共伴する灰釉陶器は0—51期のものであり、これの実年代は10世紀のものとみることができよう。

このようにみると、A類の時期を7世紀後半、B類を8世紀、C類を9世紀、D類を10世紀、E類を11世紀と概略みることができよう。しかし、それぞれの類の中でも当然前後関係が考えられるが、ここではA—E類を7世紀—11世紀の土器として大雑把にとらえておくことにする。

この類別の分布をみると、国分尼寺が創建されたとみられる8世紀には東側に寄った部分には集落は及んでおらず、尼寺の寺域想定の一つの根拠を与えている点は注目すべきであろう。

## ② 国分尼寺の寺域について

今次の調査では寺域確定の資料を得ることも大きなねらいの一つであった。しかし、それについての積極的な資料を把握するまでには至っていない。

そこで、今回得られた資料という限定された枠の中で国分尼寺の寺域を想定してみたい。上野国分僧寺については以前の調査で「築垣一廻二町」の実態についての資料を得ている<sup>(8)</sup>。これでみると、土壘の下巾は4.5m内外になる。その規模は方2町とみられているが、尼寺の場合はやや僧寺より規模が小さいものが多い<sup>(9)</sup>。

従来実施された上野国分尼寺の調査結果では寺域は192m（約640尺）四方と推定されている。<sup>(10)</sup>これは推定講堂址と金堂址の心々距離48m（約160尺）を基準に金堂中心からその2倍を機械的に割り出した数値である。事実、昭和45年度の調査では、この推定線上に確たる寺域の境界を検出するに至らなかった。

今次のA地点でも、当然この数値の中でもトレンチを入れたが、192m地点で寺域界となる証左は得られなかった。このことは、従来の寺地の想定を修正せざるを得ないことが立証されたとみてよからう。

そこで新たな視点で寺地について資料から割り出すと、結論的には上野国分尼寺の寺地は東西1町、南北1.5町の線が濃厚となった。

すなわち、C拡張トレンチでの所見で推定金堂址中心部からほほ55mの地点で外側に深さ65cm巾3mの溝（4号溝）をもち、その内側に高さ60cm、下巾4m、上巾3mの土壘状の高まり

を認めることができた。この走向はほぼ南北線にのるものとみられるものである。上野国分僧寺のそれより小規模であるが、これは寺地そのものの規模から来るものであろうと考えて、一応寺域界とみた。また、この外側は浅間B軽石が10mほど純堆積をしており、前述の集落も9世紀以降の住居はこれより奥にのびることはない。このことは、国分尼寺に対する意識がまだ当時の人々の間にあり、それに制約された結果と考えた。

また、近年の調査結果からみても東西1町の寺地をもつ國分尼寺が比較的多くなってきていく趨勢も見逃せない。

上野国分僧寺と國分尼寺の心々距離5町は從来通り認めるものとすれば、条里とからめて1町とか1町半の区切りのいい数字で企画することの方が妥当性をもつという考えも東西1町の寺地想定の根拠となりうるであろう。

以上のような観点から、ここでは、上野国分尼寺の寺地を東西1町とみる立場を明らかにしておきたい。

### ③ その他の遺構

溝、土塙が検出されたが、これらは方向、掘り方からみて、上野国分尼寺とは直接関連するものではなく、埋土、出土遺物の状態から、中世以降の溝であろう。

## 2 B 地 点

豎穴住居跡9軒、溝、土塙5基を検出した。豎穴住居は前述のD類に該当するものを主体とするものとみられ、墨書き器、瓦の出土がめだつ。トレンチ調査のため詳細は不明であるが僧寺城の東に接する部分であり、僧寺との関連をもつ遺構であろう。

また、景德元宝の出土は、中世における遺構があった証拠で、北部分の所見と相通するものであろう<sup>(11)</sup>。骨片の出土と合せて、墓塚の存在が想定され、墓地として利用されたことをうかがわせる。

## 3 C 地点およびD地点

南北方向に2条の溝がC地点で認められたが、これらの走向は上野国分寺の想定寺域線とはや方向を異にしていること、D地点における溝（ないしは穴）から中世のものとみられる陶器、石造品が出土していることからみて、直接僧寺とかかわるものではないとみられる。おそらく、後世、寺地からははずれた隣地であったために人工が加わったものとみられるが、その性格については不明である。なお、C地点、D地点の溝が連続する可能性もトレンチ調査の段階でうすれてきているので、途中、不連続で検出されるものとみることが妥当であろう。

注1) 「考古学ジャーナル」1967、5、渡辺直経、栗原遺跡の炉およびかまど焼土の熱残留量  
気方位

2) 『上武国道地域埋蔵文化財調査報告』III

3) 『群馬文化』、177号、須田茂

「上野国分寺の軒瓦」のII期からIV期に該当

- 4) 「群馬県史研究」、第8号「群馬県下の歴史時代の土器」井上唯雄、VI類の遺跡
- 5) 天仁元年（1108）降下  
「考古学ジャーナル」、1979、1、「群馬県における火山堆積物と遺跡」所収、新井房夫論文
- 6) 前掲注3
- 7) 前掲注4
- 8) 上野国分寺寺域縁辺の調査、1975、群馬町教育委員会、大江正行、井上唯雄
- 9) 「新版考古学講座」6、有史文化（上）雄山閣。石田茂作、「国分寺跡の発掘と研究」P84
- 10) 「上野国分尼寺跡発掘調査報告」、昭45、群馬県教育委員会
- 11) 前掲注10

#### 4 軒瓦について

軒丸瓦5点、軒平瓦8点、計13点の軒瓦が出土したが、ここでそれらの位置づけをしておきたい。しかし、上野国分寺における軒瓦の検討はまだまだ不十分なものであり、現段階で今回出土の資料の位置づけを行なうことは困難である。そこで、先に上野国分寺の軒瓦について、その試論を提示してあるので、それを主なりどころとして考察したい。

上野国分寺の軒瓦の研究は日が浅く、それを検討する試みはあまりなされてこなかった。その理由の一つとして、軒瓦の種類が多く、型式分類等の作業が困難であったことが考えられる。上野国分寺の軒瓦の型式数は同型異范のものも別なものとすると、軒丸、軒平とも60以上が数えられ、未確認のものや、将来の新資料の増加などを含めれば、100前後の数になろうことが予想される。

そのような多数の軒瓦を系統性や文様変遷の観点から検討し、以下のようにとらえた。

まず、軒丸瓦をみると、その文様は大別すると二つに分類された。前者は単子葉弁文のグループである。弁数は大部分五弁ないし四弁で、二重線の花弁であることが特徴である。後者は単子葉弁文系以外の諸種である。文様は八弁文のものが多いが、それらに共通性がみられるものではなく、要するに単子葉弁文系以外のものを一括したものである。そして系統的にみると、両者共いくつかの系統に細分しえる可能性を考えているが、現段階では単子葉弁文類にそれをみとめている。そこで単子葉弁文類を細分すると、少くとも二ないし三以上の系統があるとみられる。ここではその中の2つのものをA系類、B系類とし、それ以外のものを「A系類B系類外」のものとし、一応、単子葉弁文類を3分類した。

単子葉弁文類のA系類、B系類は共に上野国分寺創建瓦とみられる単子葉二重線五弁文軒丸瓦を祖型式とし、樹枝状の変遷がたどれるものとみられるが、A系類B系類外のものの系統観は不明確である。

以上のように、上野国分寺の軒丸瓦の系統は四種に区分された。そして軒平瓦もこれに対応させて四種に区分した。各系統の特徴をまとめると、右表のようになる。

### 軒瓦の型式分類

#### (1) 軒丸瓦

系 統		特 徴
単子葉弁文類	A系類	国分寺創建期瓦を祖型式とし、樹枝状の変遷がみられる。 祖型式は単子葉二重線五弁文であり、特徴としては、花弁は長めで先端が尖り、その根元は離れている。
	B系類	A系類と同様、創建期瓦を祖型式とし、樹枝状の変遷がみられる。本類の特徴は花弁の先端に丸みをもち、その根元が接する傾向があることである。
	A・B系類外	創建期のものは含まず、創建期以後の時期のものとみられる。現状では系統観は明確でないが、A系類やB系類に近いとみられるものがあるが、反面、間弁の装飾や文様のつくりにAとBにみられない要素をもつものがある。
非単子葉弁文類	文様型式は種々あって、国分寺式瓦（単子葉弁文類）のものに比べれば、それ以前からの伝統的、在地的な系譜につらなるものや、新型式のものが流入してきたとみられるもの等がある。 文様としては8~10弁で単子葉か無子葉の簡略なものが多いが、複子葉弁のものなどもあるとみられる。	

#### (2) 軒平瓦

系 統		特 徴
唐草文類	A系類	祖型式は創建期瓦であって、系統変遷がみとめられる。 文様の特徴は葉から葉へと連続的に派生し、界線は単線である。軒丸瓦単子葉弁文類A系類に対応するものとみられる。
	B系類	A系類と同様、祖型式は創建期瓦であり、系統変遷がみられる。 文様の特徴としては、唐草の葉が個々界線から出ていて不連続的であること、界線は二重のものが多いことである。軒丸瓦単子葉弁文類B系類に対応するものとみられる。
	A・B系類外	国分寺創建期以降のものとみられ、系統観は不明確である。退化した唐草文とみられる。軒丸瓦単子葉弁文類A・B系類外の中に対応関係があろうかとみられる。
非唐草文類	文様は伝統的な重振文や新流行の重郭文や飛雲文など種々であり、文様の細分類の可能性が多い。軒丸瓦単子葉弁文類外のものと同様に位置づけられ、それとの対応関係があろうかとみられる。	

つぎに文様変遷の段階区分についてみる。国分寺の創建期から末期までのものを含み、文様の系統変遷がみられるものとしては単子葉弁文類A・B系類のものがあげられる。つまり、A・B系類の変遷過程は上野国分寺の軒瓦の変遷の一端を明瞭に表わしていると考える。そこで、文様変遷の段階区分の主軸にはA・B系類のものを引き、方法論的には無理があるが、それ以外のものはその区分にあてはめるようにした。具体的には国分寺軒瓦の変遷は4段階（期）に区分した。それは下表のようである。

### 軒瓦文様変遷

段階		特徴
軒 丸 瓦	I類	単子葉二重線五弁文で、蓮子1+5のものを指標とする。 文様構成は規格的で、瓦のつくりも良好なものが多い。
	II類	I類の要素を残すが、文様のつくりから緊張感がみられなくなり、全体のつくりもやや雑になる。 蓮子が1+4のものが表われる。
	III類	文様の簡略化が進み、文様基本構成がI・II期とは異なるようになる。 無子葉重線文や単子葉一重線のものが多くなる。
	IV類	文様はさらに大きく変化し、退化する。瓦のつくりもよくないものが多い。 四弁文が主流となり、瓦当面は小規模になる。
軒 平 瓦	I類	文様構成は規格的で整然としている。 唐草文ではその派生に連続した流動感がある。
	II類	I類の要素を継承し、規格性があるが、流動感はみられなくなる。
	III類	文様構成が簡略化する。
	IV類	文様はさらに退化する。I・II類とは大きくかけはなれた唐草文などもみられ、中には手がき文などもみられる。

軒瓦変遷の段階区分は以上のようなであるが、これは時間的な経過も表わしていると考える。そこで上野国分寺の存続期を12Cまでとして、あえて大まかな年代観をあてると下記のようになると思われる。

I期………8C中葉～後半

II期………8C後半～9C

III期………9C～10C

IV期………10C～

最後に、以上のことから上野国分寺の変遷に伴う軒瓦のあり方を想定してみる。I・II期の軒瓦、特にA系類B系類は、単子葉二重線五弁文軒丸瓦と右偏行唐草文軒平瓦の組み合わせであって、単一系種であるが、出土量は多い。文様のつくりは創建期瓦とみるとふさわしいものであり、この段階では実際の軒装飾に軒瓦組み合わせが保持されていたとみられる。しかし、III期以降のものは、文様の種類が多いのに対し、個々の出土量は少ない。そのことからIII期以降の軒瓦は長期間、度重なり行なわれた後補のものとみられる。III期以降の国分寺の軒瓦組み合わせはしだいに崩壊せざるをえなくなっていたものとみられる。

上野国分寺軒瓦の概略は上記のようにまとめられた。この見解に立てば、今次出土の軒瓦は下記のように位置づけられる。

	遺物番号	文様構成	時期	系統
軒 丸 瓦	081	(無子葉八弁文、蓮子1+4)	II~III期	非単子葉弁文類
	152	単子葉二重線五弁文、蓮子1+5	I期	単子葉弁文A系類
	153	無子葉二重線五弁文、蓮子1+5	III期	単子葉弁文A系類
	154	無子葉二重線四弁文、蓮子4	III期	単子葉弁文B系類
	175	081に同じ		
軒 平 瓦	055 075	右偏行唐草文 二重界線	II~III期	唐草文B系類
	135	右偏行唐草文 二重界線	III期	唐草文B系類
	142	変型唐草文 二重界線	IV期	唐草文B系類
	150	右偏行唐草文 二重界線	III~IV期	唐草文B系類
	151	右偏行唐草文 一重界線	II期	唐草文A系類
	171	右偏行唐草文 二重界線	III期	唐草文B系類
	172	四重卯文	I~II期	非唐草文系類

## 5 文字瓦について

今次の調査で発見された文字瓦は24点で、それを表示すれば、下表のようである。

No	文字	出土地点	関連する二字以上文字瓦銘
019	?	A-6住No 6	
053	長	A-D-9住No 4	「長麿」
054	武?	A-9住	「武里」「武三乙一」(武美郷)「武物女」「武子長女」
060	?	A-10住No 6	
079	八	A-12住No 8	「八田」(矢田郷)「八月乙」「八井」「八真」「八伴」「八田継」
110	長	A-19住No 11	「長物女」
113	十	A-20住No 3	(一字瓦のみ)
120	廿?	A-21住No 3	(初見)
134	十	A-28住	(一字瓦のみ)
138	山	A-30住	「山宇稻目」(山宗郷)「山部」「山乙」
140	□		刻印
141	□	A-Aトレー4区	刻印(十三宝塚遺跡に同范あり)
144	生	A-B-2	(初見)
145	王	A-B-2	「王□」
146	上		
147	秋	A-B-1括トレ	「秋万」(飽馬)
149	川	A	「川山」一字瓦
159	千	B-B-No 3	「千一」
160	真人?	B-B-1	初見
161	成?	B-B-3	「家成」「印成」
162	十	B-B-1	一字瓦のみ

165	八子□	B—D—1	初見
166	十	C—D—2	
174	黒	D	「黒人」

從来、上野国分寺で発見されている文字瓦には、竪書き、押型、刻印によるものがある。これらは、ほとんどが竪書きで人名を表わしたもので、押型、刻印のものはほとんど郡郷名を表わしたもので数も少ない。

こうした見解をふまえて、今次の調査により発見されたものを整理してみると次のようにまとめられるであろう。

種別	人名	地名	その他
刻印		□(十三宝塚遺跡と同范?)	□
竪書き	主(王)(家主) 千(千一) 真人 成(家成、子成) 黒(黒人)	長 武 八(八田) 山(山田、山那) 秋(秋万)	上 川 八子口 十 番

文字瓦は從来、在地豪族による瓦の寄進を示すとされてきたが<sup>(1)</sup>近年、武藏国分寺瓦の分析から「郡をひとつの賦課の単位とし、さらに管轄下にある組織に順次に負担すべき分量を割りあてるという形」で「郡一郷一戸」という基本的形態があり、それによって記載されるという研究が出された<sup>(2)</sup>。

この考えに従えば、上野国分寺の場合は「人名」「地名」とも略記されたものが多く、これらの説を裏づける「本貫地戸主県」という武藏国分寺の文字瓦と同義に解される形を示すものはない。しかし、既にまとめられたものを集約した例でみると<sup>(3)</sup>郡名、郷名、人名とみられる各例は明らかに指摘できる。国分寺造営に対する造瓦貢納負担の体系としての「郡一郷一戸」の各段階の量のチェックのための文字瓦の意味は、それ自体、律令体制の浸透を示すものとみることができる。

一方、文字瓦に一字のみを記したものが多く、その性格規定に障害となっている事実も見逃せない。今後、両寺の発掘調査がなされた段階でより明確な結論が出されるであろう。ここでは、取敢えず、今次調査で出土した文字瓦を集約して提示したに止める。

## IV 結び

上野国分寺については、尼寺の一部を除いては、寺域内の調査は行なわれていない。そのため、両寺の寺域についても現地形からほぼ推定はされるものの確認には至っていない。

僧寺寺域内の公有地化に伴なう民家移転先については推定寺域隣接地に求める傾向が強く、今次の調査地点もそれに起因する調査であった。

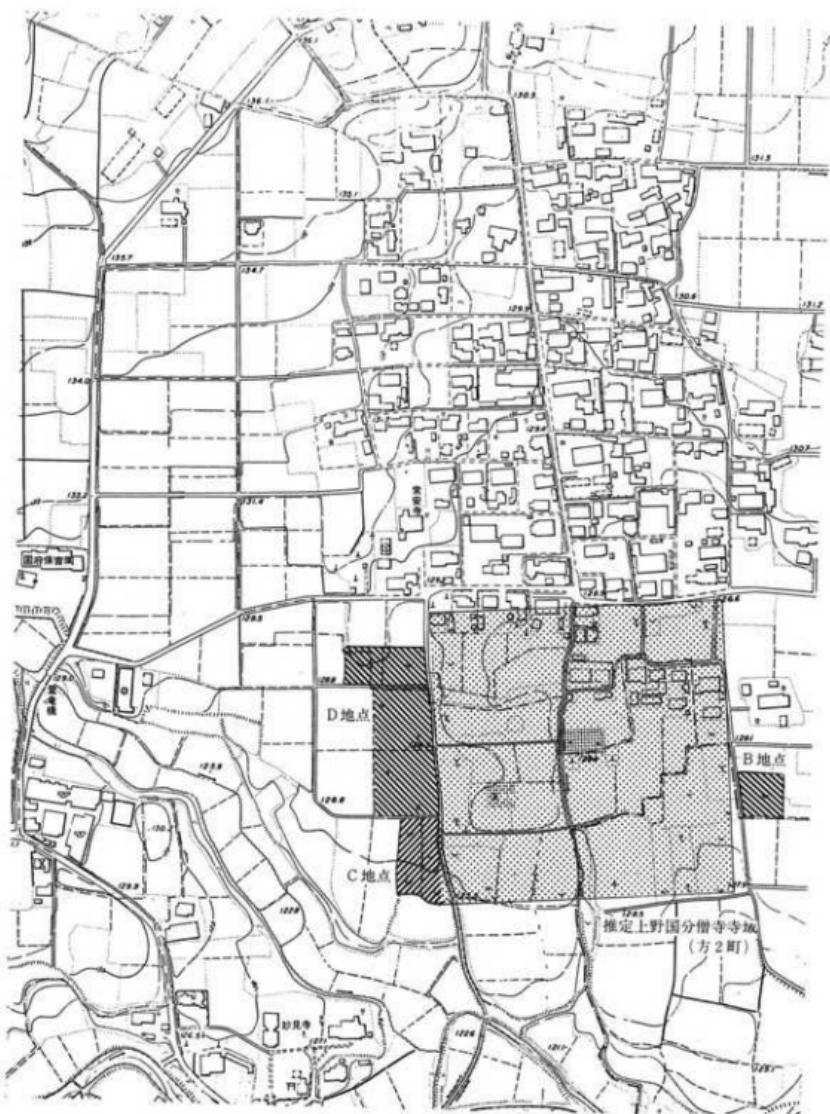
僧寺隣接地については「上野国交替実録帳」にある方2町の線がかなり確実なため、調査の結果も直接国分寺に関連するとみられる遺構は検出されなかった。しかし、尼寺については今回の調査で方192m（1.8町内外）とみる従来の見解に一部修正を加える必要のある資料を得られた。（A地点の調査）

すなわち、①尼寺中軸線から西へ55m辺り両側に溝をもつ土壘ないし築地とみられる土盛りの痕跡を認めたこと。②土壘状遺構の外縁には10m内外の間隔をおいて8世紀～11世紀にわたり、間断なく竪穴住居が検出されたこと、③土壘状遺構の外側には浅間B軽石層を含む純堆積層が認められ、居住区分から除外されていた形跡をうかがうことができたこと、等を指摘することができた。

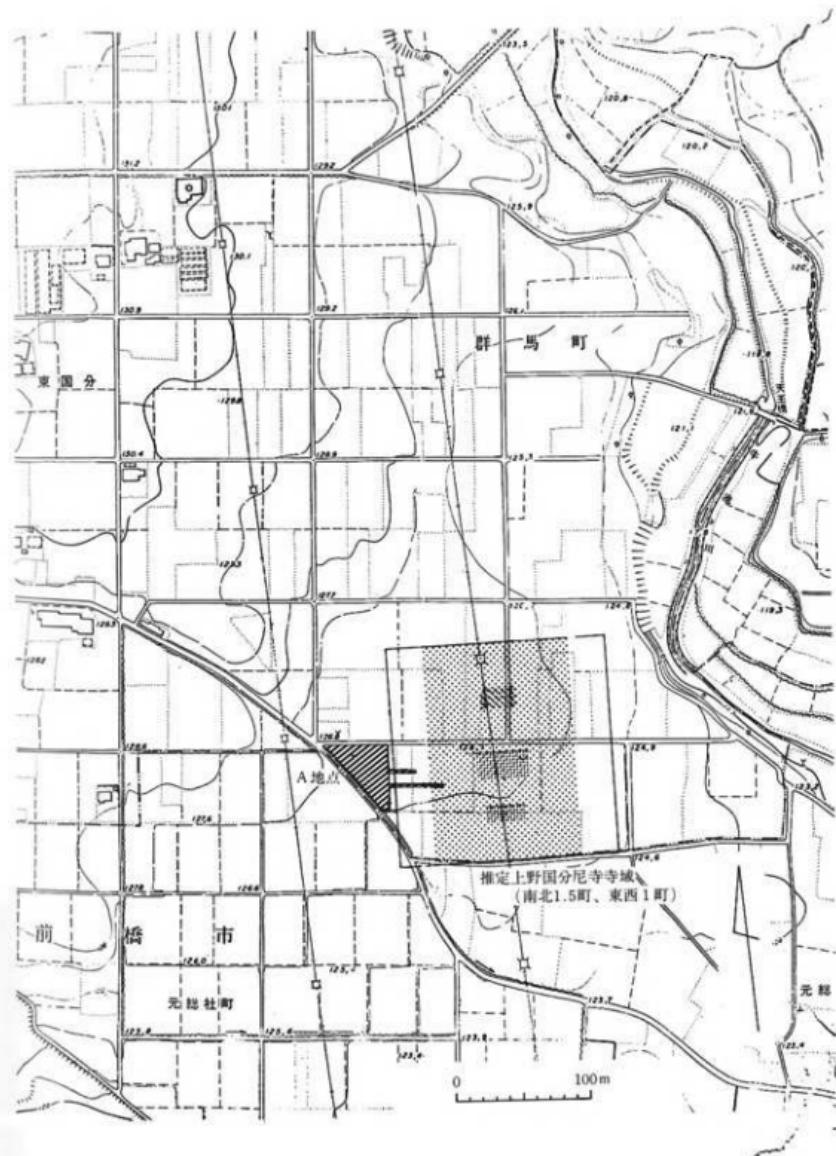
その結果、従来考えられてきた方192m（1.8町内外）区画説に対しては、東西1町、南北1.5町の規模ではないかとみる根拠を提示した。近年の発掘調査による結果でも1町の規格をもつ例もしだいに増加しており、従来の調査で積極的に方1.8町内外とする根拠を見出せなかっただけに、東西1町説も検討する必要ができたといえよう。いずれにしても、寺域の確定は寺域調査の結果にまつ以外ないので、一応の考えを提示するにとどめる。

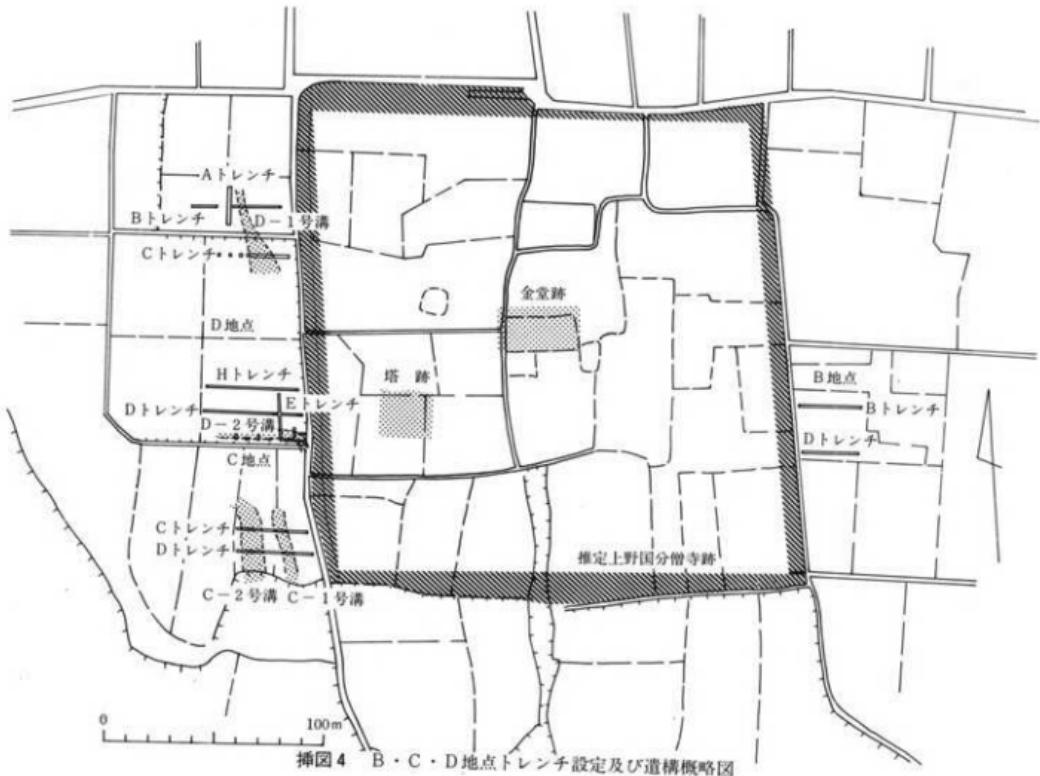
次に、従来、中間地域の調査結果から、住居跡内に瓦を持ち込む例から創建にかかる工人の住居説が提出されていたが、今次の調査結果では9世紀後半以前の住居に瓦を持ちこむ例はなく、以前の調査と異なる結果を得た。今後、関越自動車道に伴う調査でこのことが確認されるだろうが、調査地点の相違から来るものか、今次調査と同様な様相をみせるか注目される。

以上、今次調査の結果の概略と今後調査への問題点を指摘してきたが、これらは早晚、発掘調査により確認されるであろう。この調査にご協力いただいた多くの方々に、末筆ながら謝意を表する次第である。

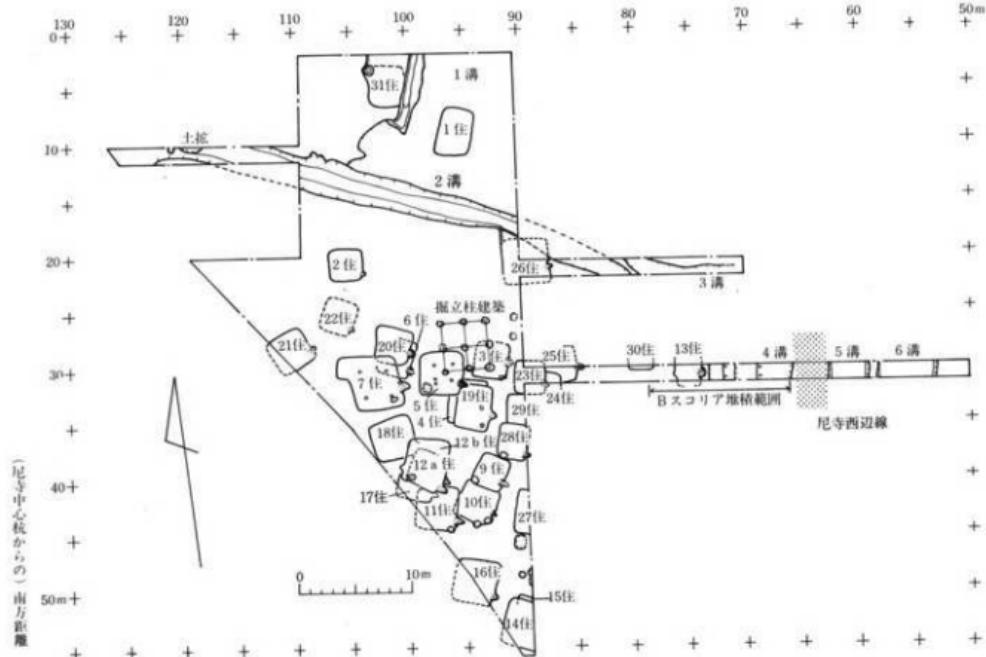


挿図3 調査地点位置図

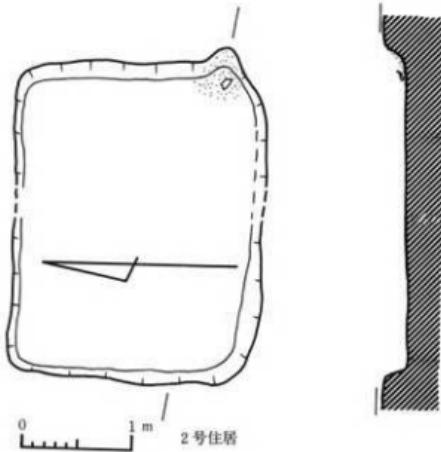
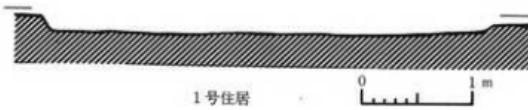
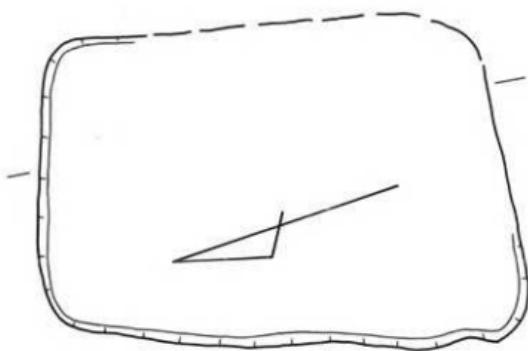




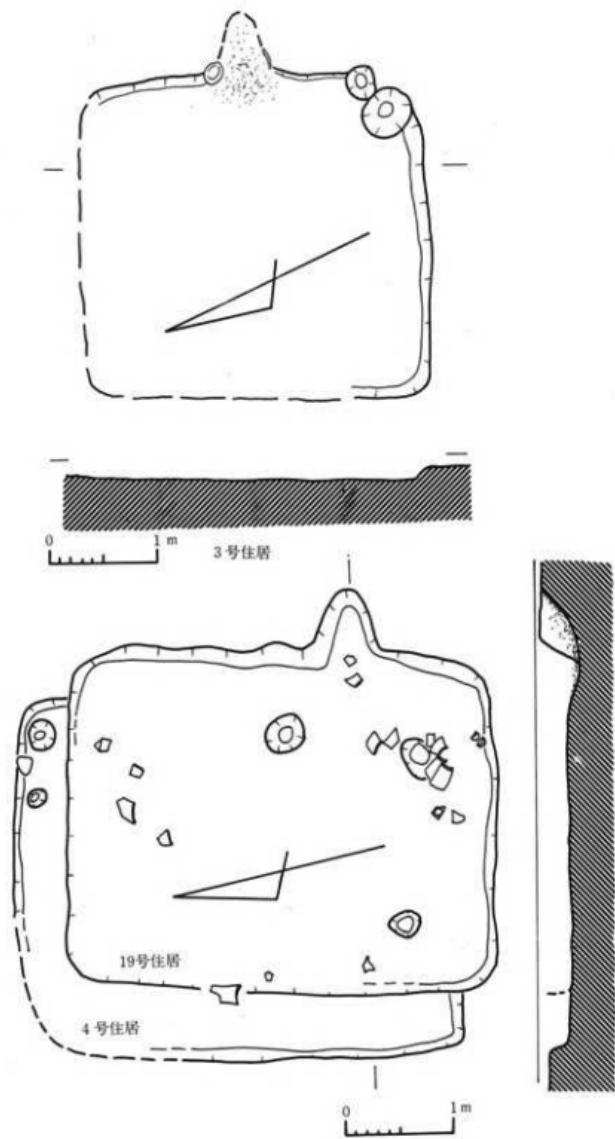
昭和43年尼寺跡調査の際の中心杭からの西方距離



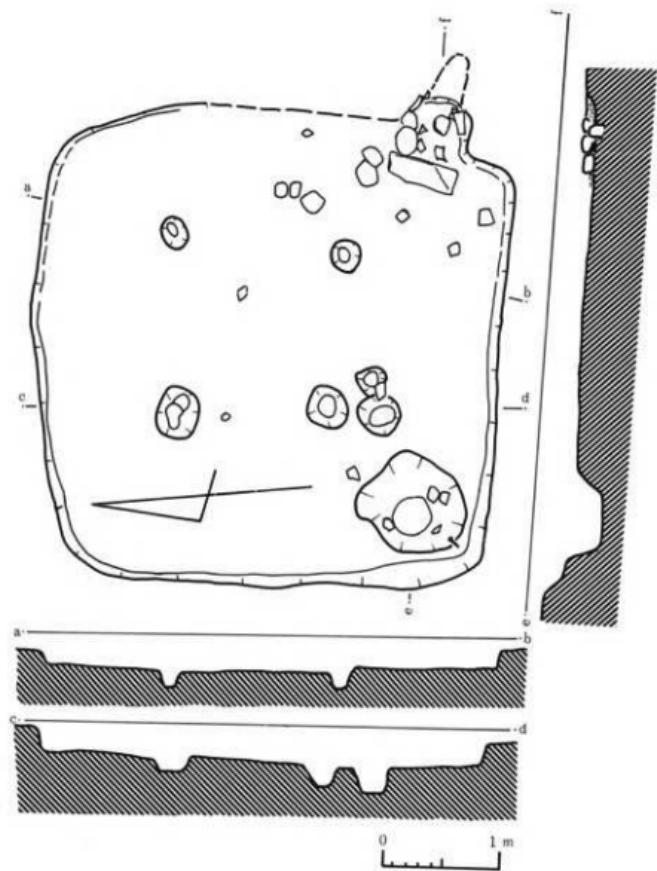
挿図5 A地点遺構配置図



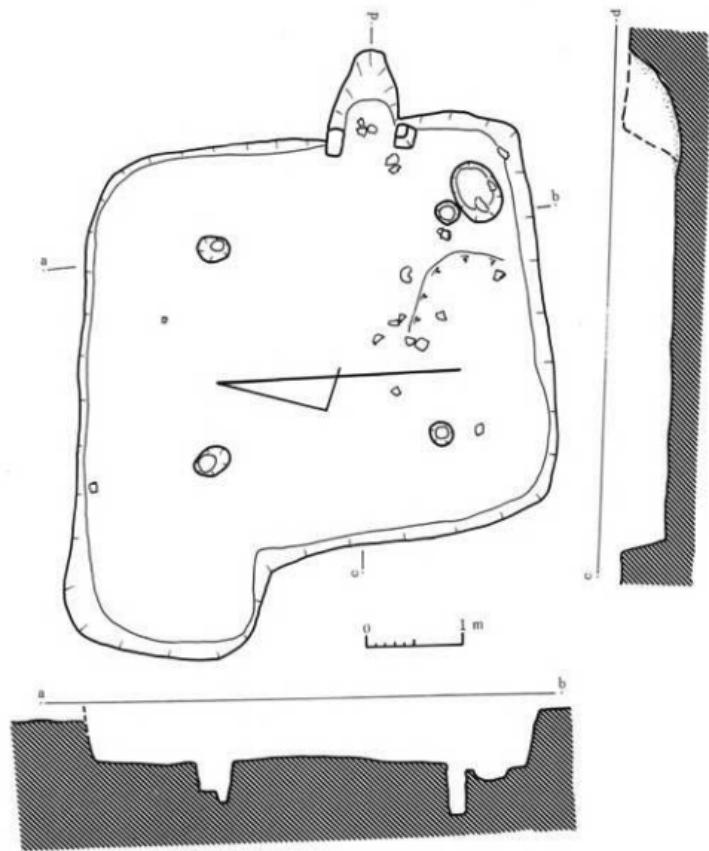
插図6 1号住居・2号住居 ( $S = 1/50$ )



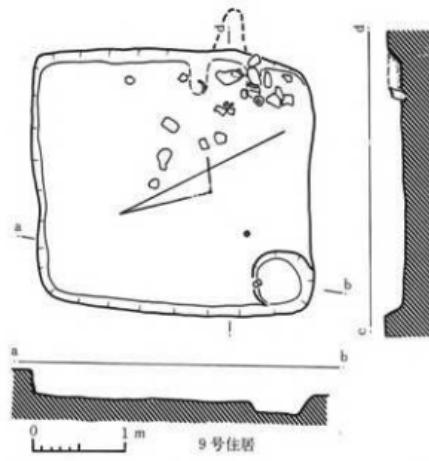
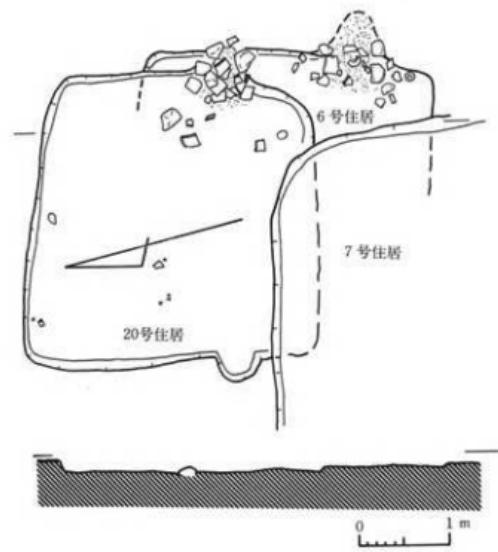
插図 7 3号住居及び4号・19号住居 ( $S = 1/50$ )



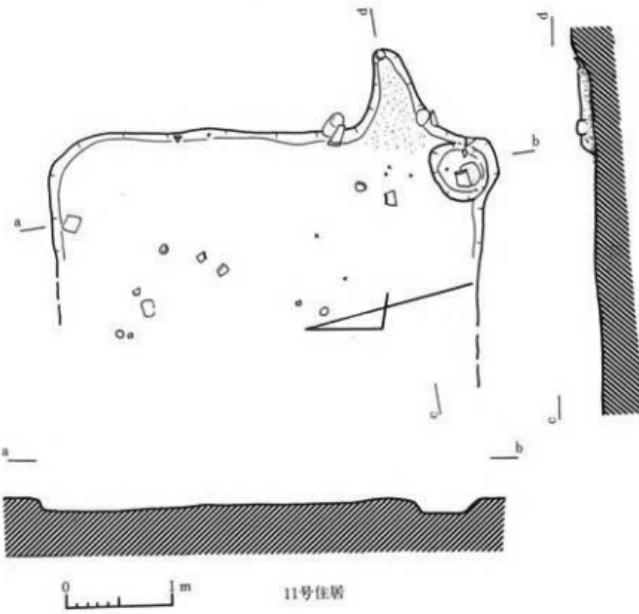
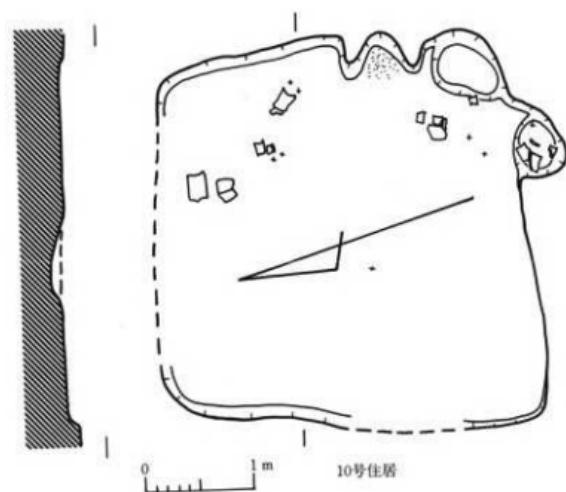
挿図 8 5号住居 ( $S = 1/50$ )



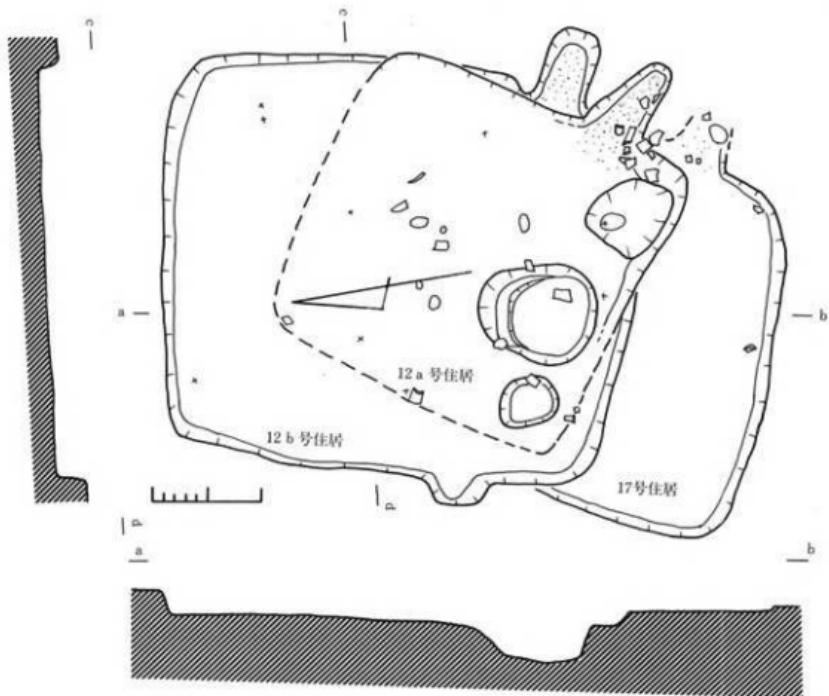
挿図9 7号住居 ( $S = 1/60$ )



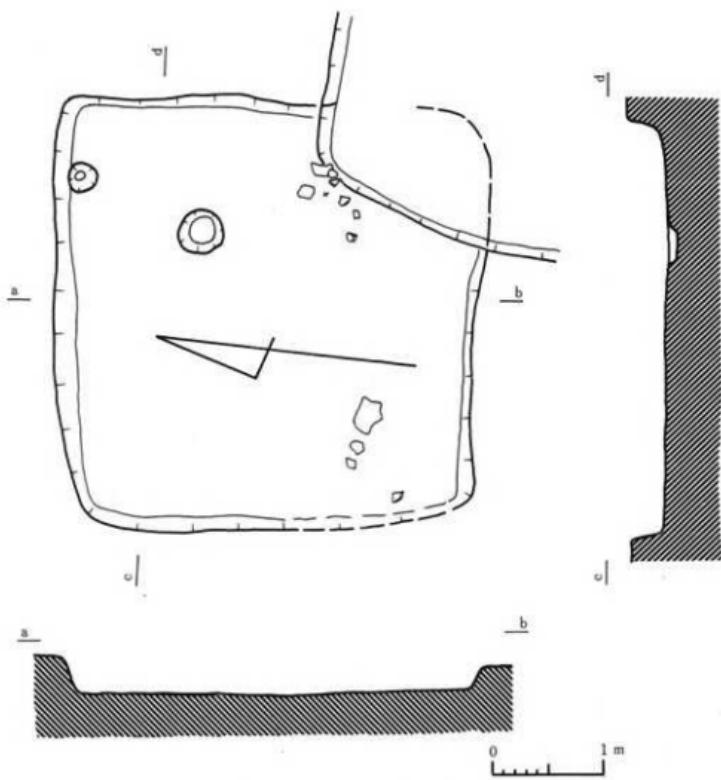
插図10 6号・20号住居及び9号住居 (S = 1/60)



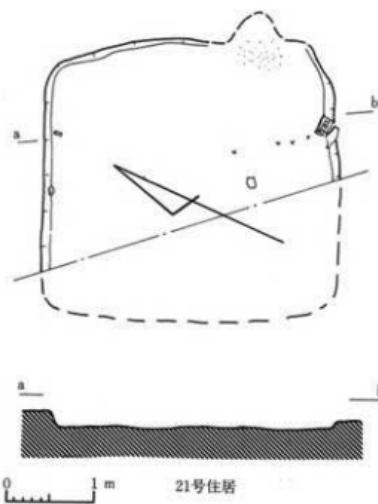
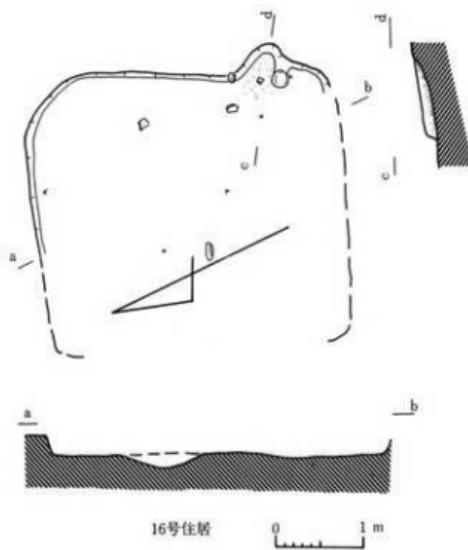
插図11 10号住居及び11号住居



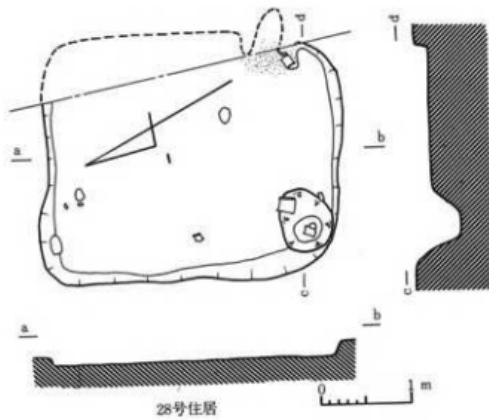
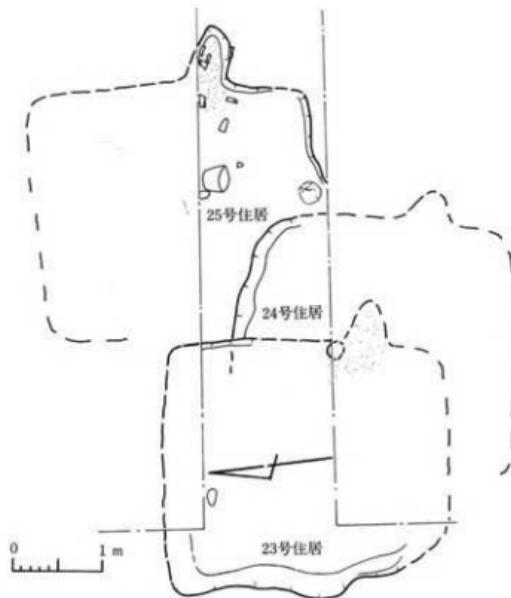
挿図12 12a・12b・17号住居 (S = 1 / 50)



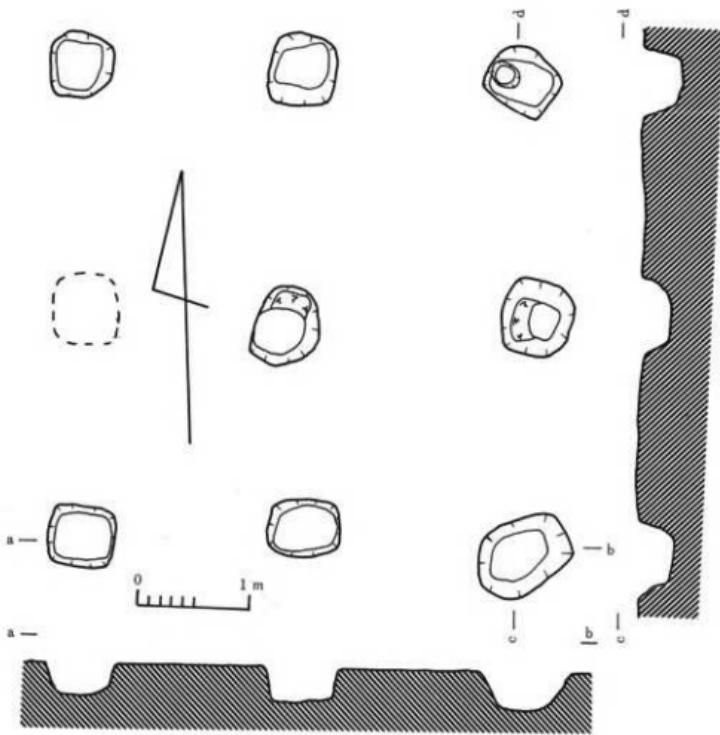
挿図13 18号住居 ( $S = 1/50$ )



插図14 16号住居及21号住居 ( $S = 1/60$ )

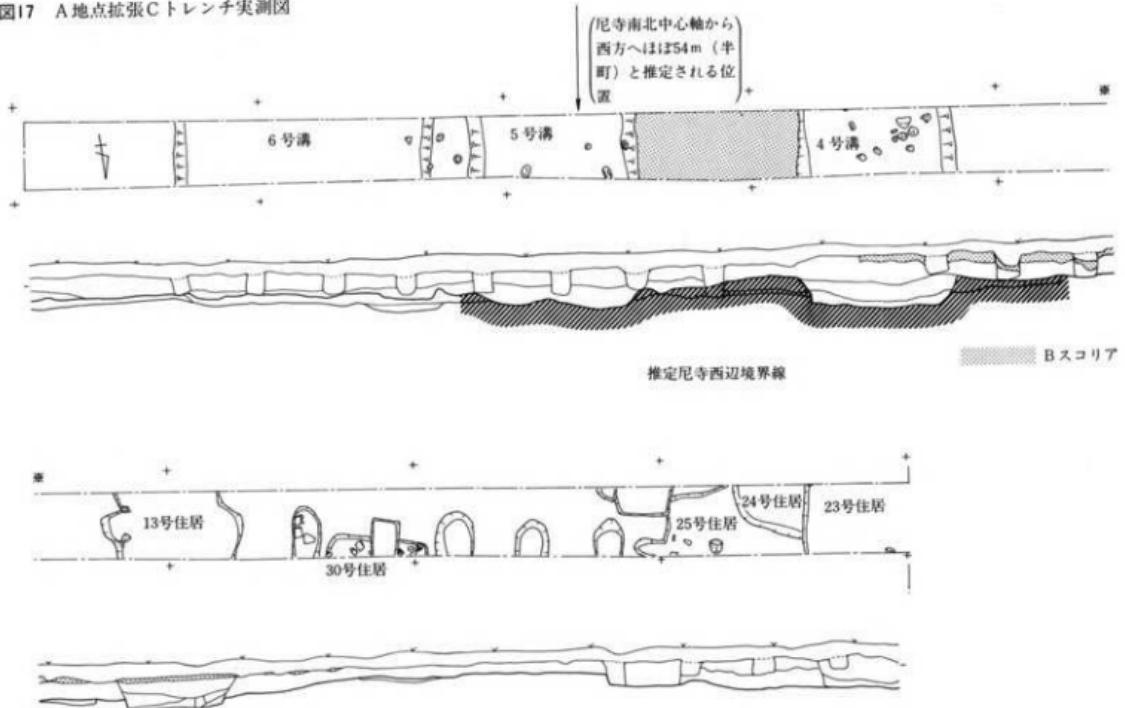


挿図15 23号・24号・25号住居及び28号住居 ( $S = 1/60$ )

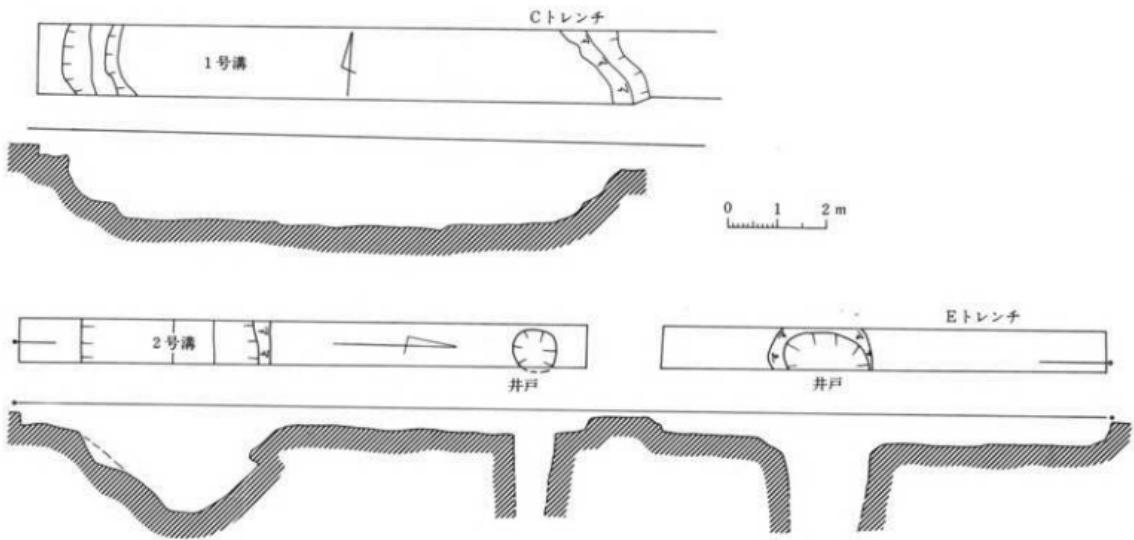


擡図16 捩立柱建築遺構 ( $S = 1/50$ )

挿図17 A地点拡張Cトレンチ実測図



挿図18 D地点トレンチ実測図



遺物実測図

A地点

1号住居



001-K

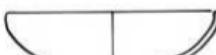


002-S

2号住居



003-S

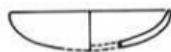


004-H

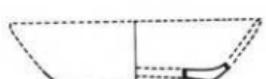
3号住居



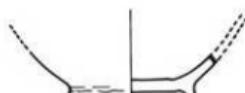
005-S



007-H

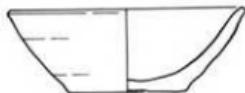


006-S



008-S

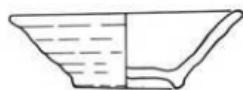
5号住居



009-H



011-H

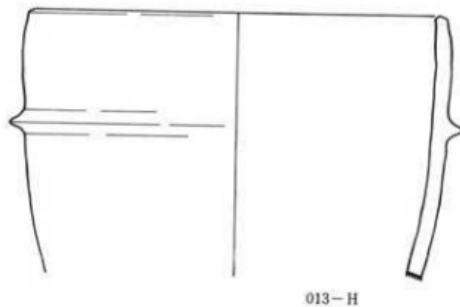


010-S

插図19



012

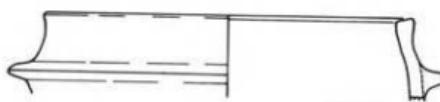


013-H

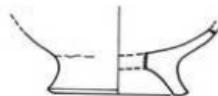
6号住居



014-S



017-S



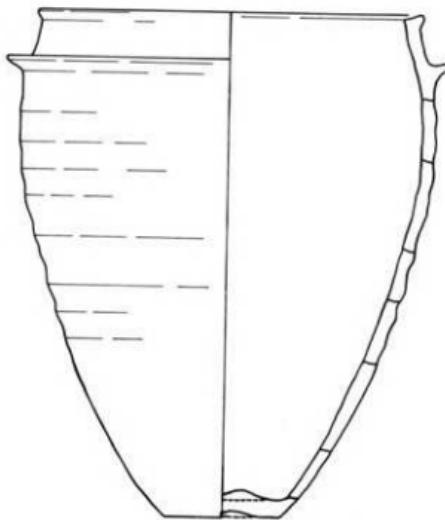
015-S



016-H



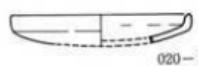
019-W



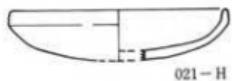
018-S

挿図20

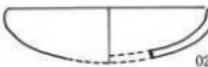
7号住居



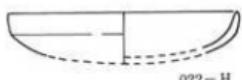
023-H



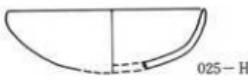
021-H



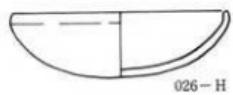
023-H



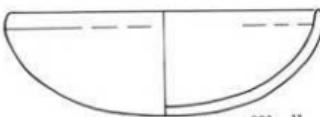
022-H



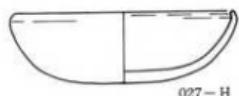
025-H



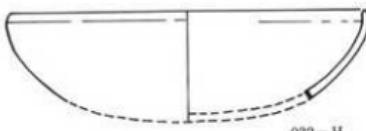
026-H



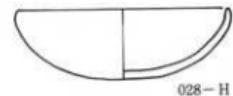
031-H



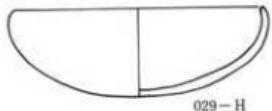
027-H



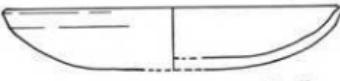
032-H



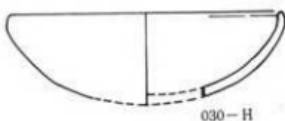
028-H



029-H

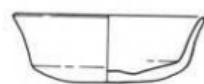


033-H

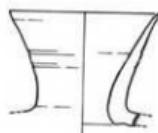


030-H

插図21



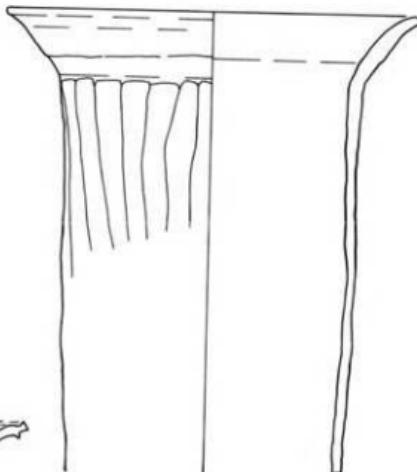
034-S



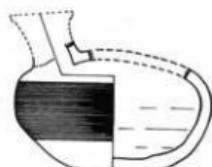
035-S



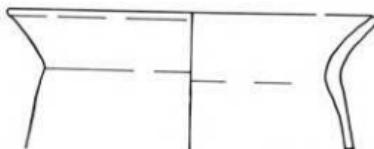
036-S



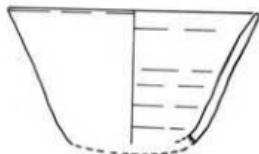
039-H



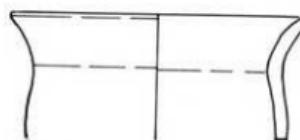
037-S



040-H



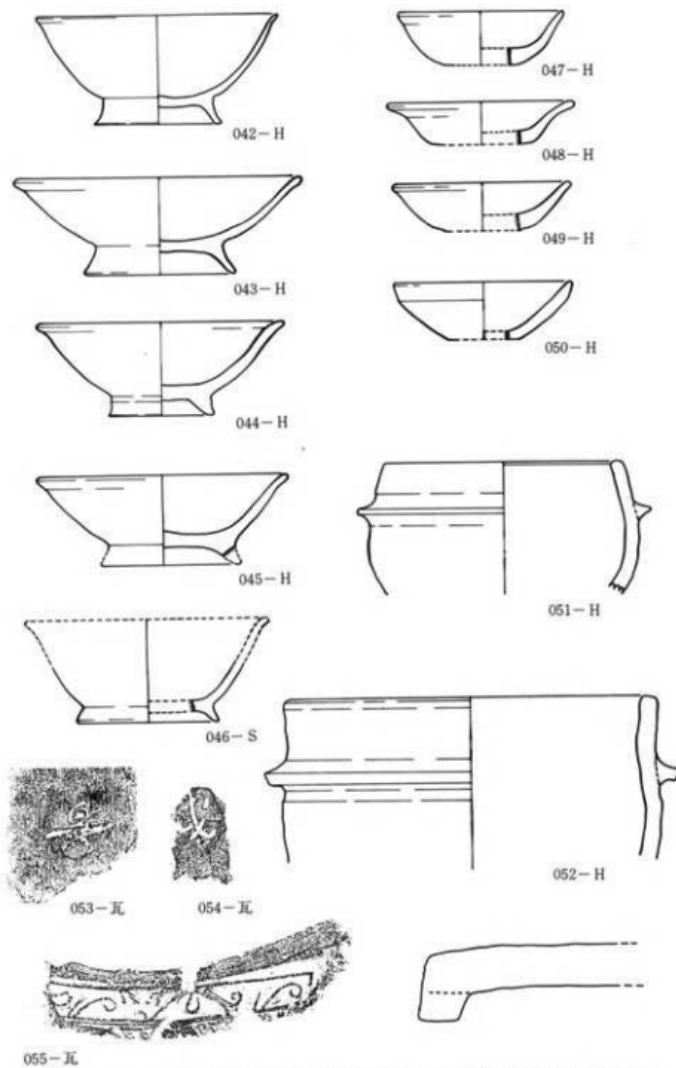
038-S



041-H

挿図22

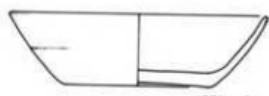
9号住居



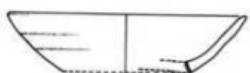
\* 9号住居のものは左半分であり本図は11号住居出土（右半分）との接合状態を示した。

挿図23

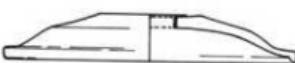
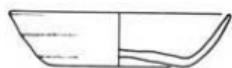
10号住居



056-S



058-S



059-S

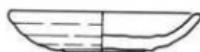


057-S

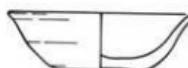


060-W

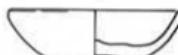
11号住居



061-H



064-H



062-H



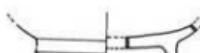
065-H



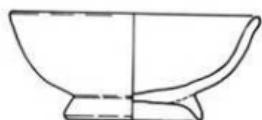
063-H



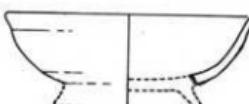
066-K



067-K

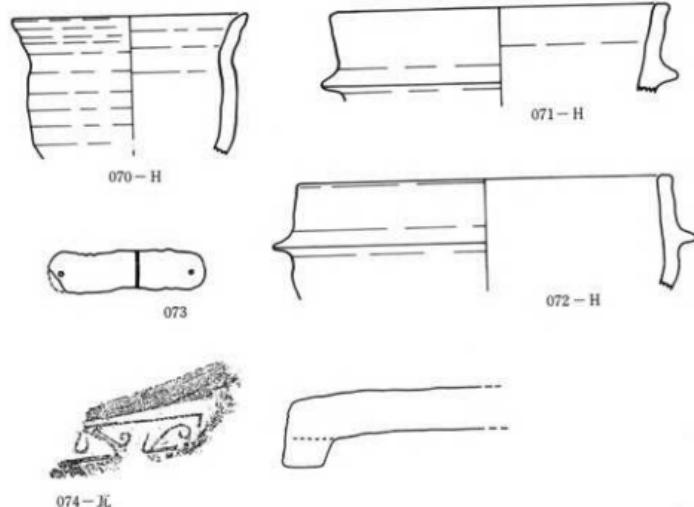


068-H

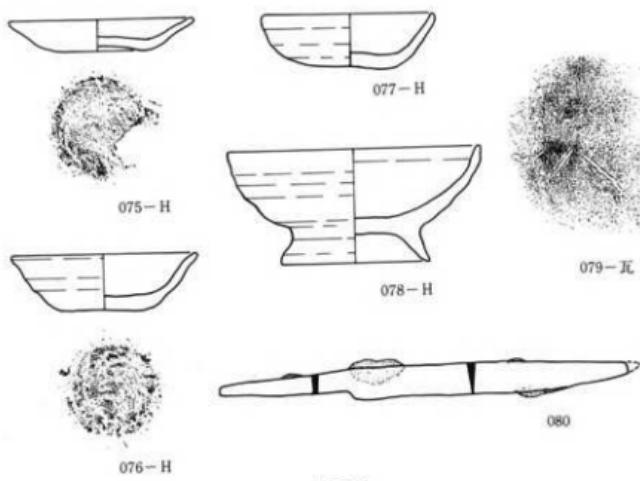


069-H

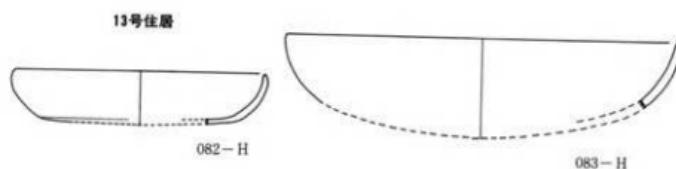
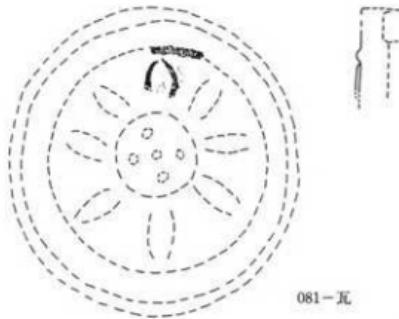
插図24



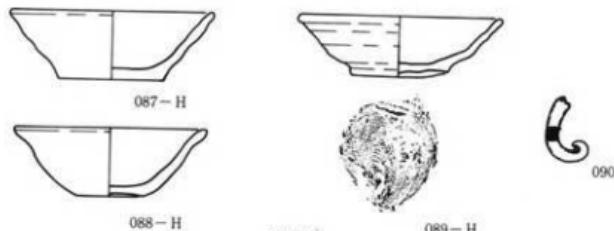
12号住居



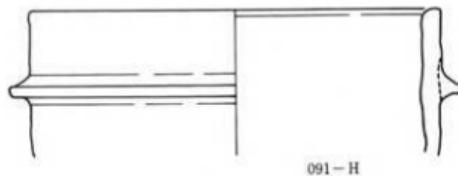
挿図25



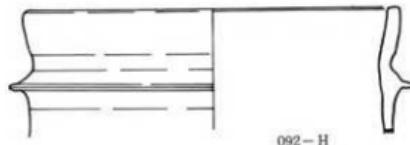
15号住居



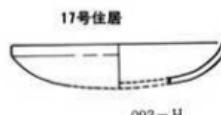
插図26



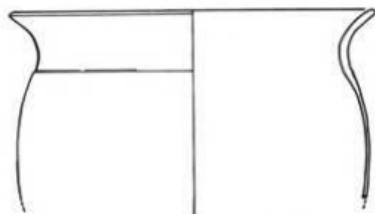
091-H



092-H



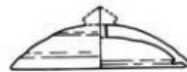
093-H



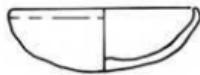
094-H



095-H

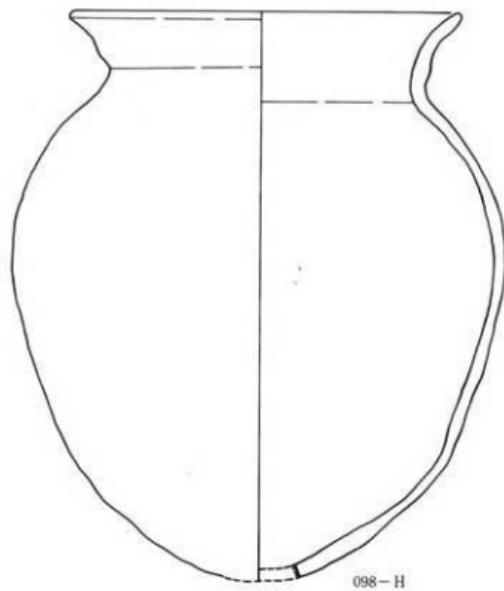


094-S

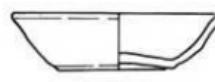
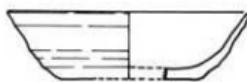
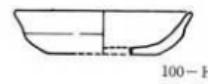
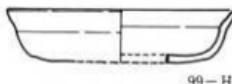


096-H

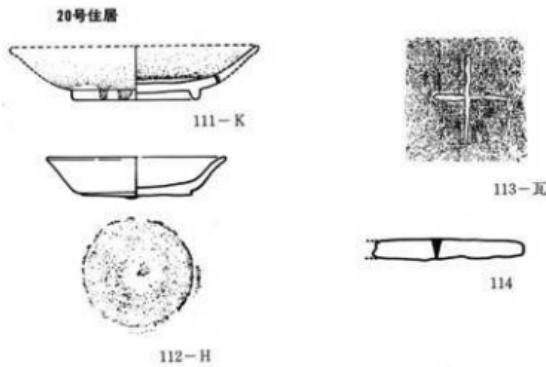
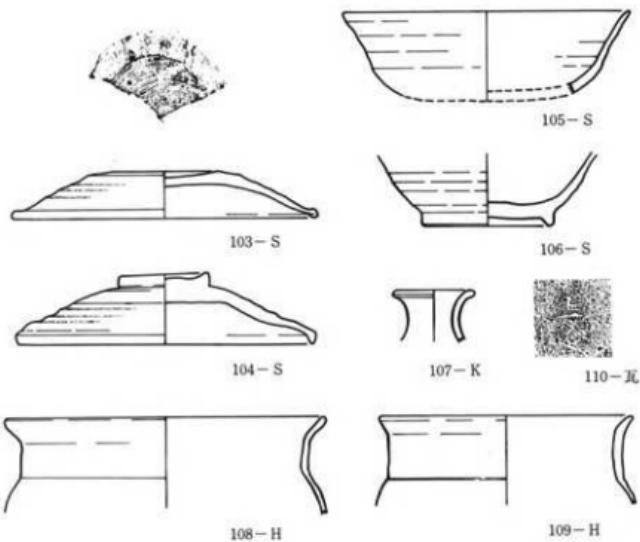
插图27



19号住居

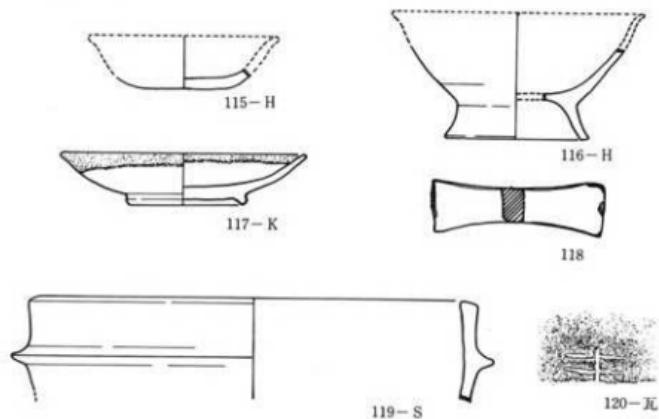


挿図28

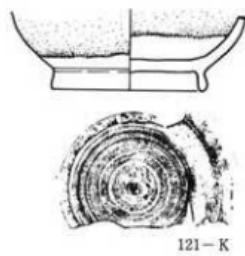


插図29

21号住居



22号住居

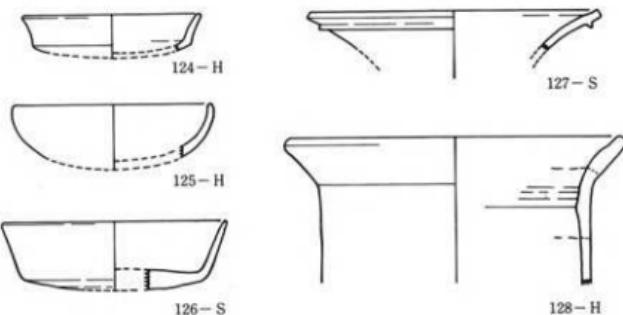


25号住居



插図30

26号住居



27号住居



28号住居

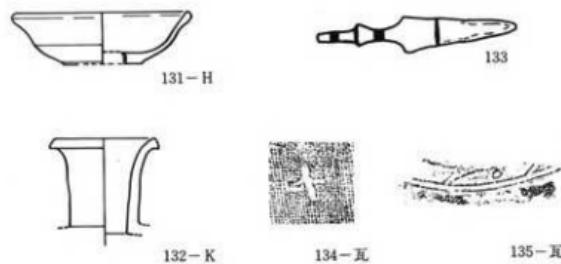
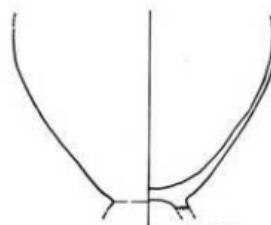


插图31

30号住居



136-H

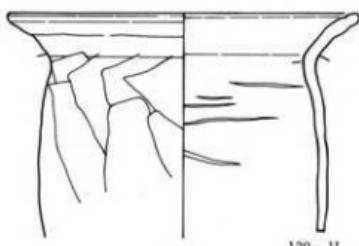


137-H



138-瓦

31号住居



139-H



140-瓦



141-瓦



143



142-瓦

Aトレンチ



Bトレンチ



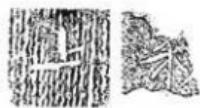
145-瓦

拡張Cトレンチ



149-瓦

拡張Dトレンチ



146-瓦

147-瓦



148

插図32

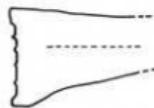
A トレンチ



B トレンチ

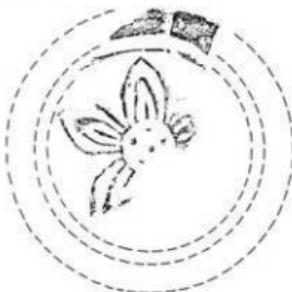


150-瓦



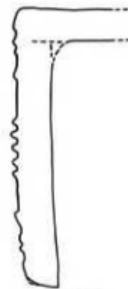
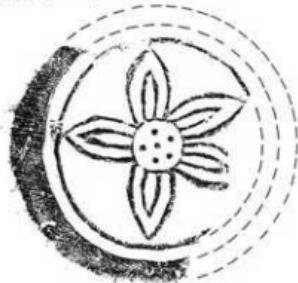
151-瓦

A 地点



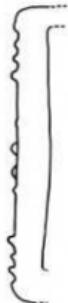
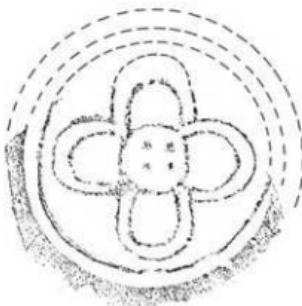
152-瓦

拡張B トレンチ



153-瓦

插図33



154-瓦

B地点

Bトレンチ



155-S



156-H



157-H



158-H



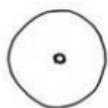
159-瓦



160-瓦



161-瓦



163



164



165-瓦

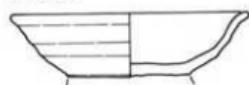


162-瓦

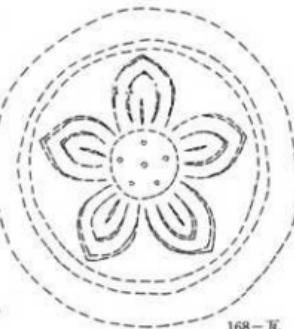
挿図34

C地点

Dトレンチ



167



168-瓦

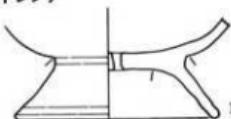


166-瓦



169

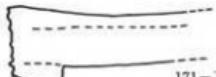
Cトレンチ



170

D地点

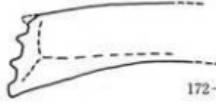
1号溝



171-瓦

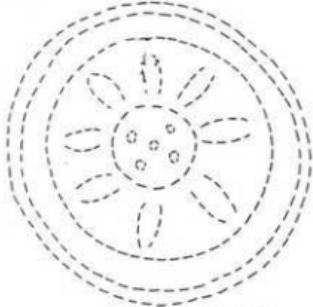


177-瓦



172-瓦

Eトレンチ



175-瓦



174-瓦



176-瓦

挿図35

插圖36 A 地點土器編年表

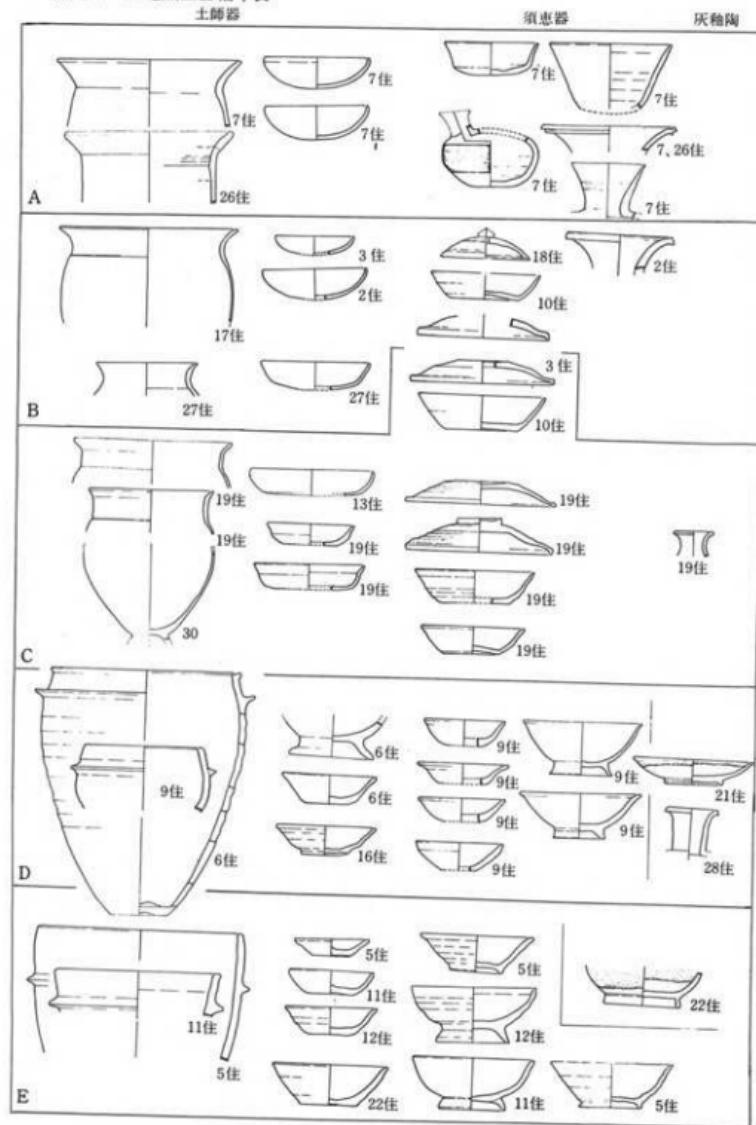


插圖37 上野國分寺軒瓦編年表

段階	單子葉弁文類軒丸瓦・唐草文類軒平瓦				非單子葉弁文類軒平瓦 非唐草文類軒平瓦
	A系類	B系類	A・B系類外		
I期	 	 			
II期	 	 			 
III期	 	 	 		 
IV期	 	 	 	 	 
	 	 			

表2 軒瓦一覧表

## (1) 軒丸瓦

No	直 怪	内 区					外 区 区	外 区				全 長	
		中 房	蓮 子	弁 区 怪	弁 巾 長	弁 文 様		外 区 巾	外 縁	内 縁	巾		
081					1.5/	無(8)							12号住居
152	(15)	3.0	1+5	11.2	2.6/3.5	単重5	1~1.5						A地点
153	16	3.0	1+5	11.5	2.4/ 3	無重5	0.8 ~1.5						A地点拡張Bトレンチ
154	15.5	3.8	4	12.8	4.2/3.6	無重4	1.0						A地点拡張Bトレンチ
175						無8							D地点Eトレンチ

## (2) 軒平瓦

No	瓦 当 面										尻				顎		全 長	
	上 弦 巾	下 弦 巾	孤 深	厚 サ	内 区		上 外 区		下 外 区		脇		文 様 面 深	巾	深	厚	巾	高
055				3.6	1.7	右唐	0.3		0.5		0.4					2	1.7	9号住居 11号住(074)と同
135						右唐			1.9									28号住居
142				4.3	1.6	変唐	1.9		1.1									A地点2号溝
150				(4.3)	1.4	右唐	0.4		0.4		0.5					3.7	2.0	A地点Aトレンチ
151					5.2	2.5	右唐	0.5		0.5		1.2						A地点Bトレンチ
171					4.0	1.7	右唐									3.6	0.8	D地点1号溝
172					4.2	四重郭												"

表3 土器観察一覧表

## 1号住居

遺物番号	器 形	法 量	器 形 の 特 徴	成整形技法の特徴	備 考
001K	段 盆	口径(13.3)	体部一口縁部小破片。 外削した体部から水平ぎみ に外反する口縁部となる。 口縁部内側に段がつく皿で ある。	体部一口縁部ロクロ横ナ デ。 底部回転糸切後、付け高台。 釉は現在では外面とも施 されている。	灰白色 胎土緻密 焼成良好
002S	高 台 付 桶	底径 (6.8)	底部汚染存。 高台はやや外側にふんばり 比較的しつかりしている。	底部回転糸切後、付け高台。 外面はロクロ横ナデ整形。	灰白色、器面は部分的 に灰黒色。 胎土、細砂粒を含み、 やや雜、軟質。

## 2号住居

遺物番号	器 形	法 量	器 形 の 特 徴	成整形技法の特徴	備 考
003S	壺	口径(12.0)	頸部破片。 外反して、水平ぎみに開く。 端部はやや上向く。	ロクロによる横ナデ整形。	青灰色 胎土、やや緻密 焼成良好
004H	环	器高 3.7 口径 12.0	汚残。 体部は丸底で、脇曲し、口 唇部は短く内脅する。	内面底部はユビナデ。外面 はヘラケズリ。内面体部～ 外面口縁部、横ナデ。	赤褐色 胎土、細砂粒を含む。 焼成良好 カマド出土

## 3号住居

遺物番号	器 形	法 量	器 形 の 特 徴	成整形技法の特徴	備 考
005S	蓋	口径(15.0)	体部、口辺一部残存。 天井部は浅くならかに下 外方に下り、端部は近くで 水平にのび、下方に屈曲し て端部にいたる。	ロクロ成形、内外面ヨコナ デ。	明褐色 胎土緻密 焼成やや不良、軟質。
006S	环	口径 (8.4)	底部、体部小破片。 底部は底上がりで、体部は やや急に立つ。	底部回転糸切り。 体部外面及び内面はロクロ ヨコナデ。	灰白色 胎土、砂粒少し含む。 焼成ふつう
007H	环	器高 (2.2) 口径 (8.1)	口縁部破片。 体部は丸くやや外脅し、口 縁部はやや急に立つ。	体部外面ヘラケズリ。 口縁部内外面ヨコナデ。	赤褐色 胎土、細砂粒含む。 焼成やや良好
008S	高 台 付 桶	底径 (7.3)	高台部充存、体部下半部残 存。 高台は底くやや外方に開き 体部は外脅し、しだいに急 に上る。	底部回転糸切り後、付け高 台。 内外面、ロクロ横ナデ整形。	器面黒灰色、内部青灰 色 胎土緻密 焼成良好、硬度ふつう

## 5号住居

遺物番号	器 形	法 量	器 形 の 特 徴	成整形技法の特徴	備 考
009H	碗	器高 4.6 口径 13.3 底径 6.6	平川な底部から外脅する体 部となり、口縁部は外反氣 味で丸味がある。	底部回転糸切り。 内外面、ロクロ横ナデ。	暗褐色、底部灰白色 胎土砂粒を含みやや雜 焼成不良でもろい。

010S	高台付楕	器高 4.1 口径(13.0) 底径 6.2	体部の%を欠く。 太く短い高台から直線的な体部がつづき、外反する体部にいたる。口唇部は水平に近く、端部は丸い。	高台は付け高台。 整形はクロロ右回転によるヨコナデ。	灰青色 粘土、砂粒を含み粗雑 焼成やや不良で軟質
011H	皿	器高 1.9 口径 (8.6) 底径 4.5	体部の大部分を欠く。 平らな底部から直線的な体部がつづき、口唇部は厚みを増し丸みをもつ。	底部回転糸切り。 体部はクロロによる横ナデ整形。	明褐色、部分的に黒色 砂粒を少量含む。 焼成ふつう
013H	羽釜	口径(23.7) 跨高 (0.8)	垂直に近い口縁部から、骨曲ぎみに鋒を小さくして底部にいたる。鋒は小さく、断面三角形状を呈す。	内外面ともヨコナデ整形が施されているが、輪積瓶がうかがえる。	暗赤褐色 砂粒多量 焼成ふつう カマド出土

### 6号住居

遺物番号	器 形	法 量	器 形 の 特 徴	成整形技法の特徴	備 考
014S	楕	器高 3.3 口径 11.0 底径 4.5	完形。 底部は平底で小さく、外骨曲ぎみに立ち上がる体部から外反する口縁部にいたり、端部は厚みを増して丸い。	底部右回転糸切り。 クロロ横ナデ整形。	黒色 細砂粒を含む。 焼成やや良好、やや堅硬 カマド右輪出土
015S	高台付楕	底径 (7.8)	高台部殆ど残存。 高台は高くて大きく、外方にふんばる。体部は背曲して立ち上がる。	付け高台。 右回転クロロの横ナデ整形	灰白色 砂粒を含む。 焼成やや良好、堅硬
016H	台付甕	底径 7.6	脚部のみ残存。 脚は下方に向かってやや大きく開く。	脚部は内外面ともヨコナデ整形。 体部内底はヘラ整形。	くすんだ橙色 砂粒を含む。 カマド出土
017S	羽釜	口径(20.7)	背曲した体部から外反気味に内傾した口縁部にいたる。口唇部は肥厚し、端部はやや内斜した四角形。鋒は厚く、端部は丸い。	右回転クロロによる横ナデ。	暗褐色 砂粒多 焼成ふつう 口縁部内面にスス状の黒色痕あり
018S	羽釜	器高(28.2) 口径(21.8) 胴径(23.4) 底径 (6.4)	小さい平底の底部から、体部は背曲気味に開いて立ち上がり、内傾した口縁部にいたる。 鋒は長く、上向きぎみ。 口縁端部は厚みを増し、上面はやや内斜した平坦なものである。	輪積瓶が比較的明瞭に残る 体部下位まで右回転クロロのヨコナデ整形。 体部下半部はへ方向へラケズリ。 底部はヘラケズリ。	灰白色 砂粒多 焼成やや良

### 7号住居

遺物番号	器 形	法 量	器 形 の 特 徴	成整形技法の特徴	備 考
020H	坪	口径 (9.8)	小破片。 底部(体部)はゆるく背曲し、口縁部は直立気味に立つ。	外面底部ヘラケズリ。口縁部～内面ヨコナデ。	茶褐色 細砂粒少量含有 器面に黒色物付着

021H	坏	口径(11.8)	小破片。 ゆるく脣曲する底部から、 棱をへて直立ぎみに立つ口 縁部にいたる。	外面底部へラケズリ。口縁 部～内面ヨコナデ。	橙色 砂粒含有 カマド出土
022H	坏	口径(12.5)	弓ほどの破片。 底部はゆるく脣曲し、口縁 部は直立ぎみ。	外面底部へラケズリ。内面 底部ユビナデ。口縁部内外 面から内面にかけてヨコナ デ。	明茶褐色 砂粒含有
023H	坏	口径(11.6)	弓残存。 底部は脣曲し、口縁部はや や内傾ぎみに立ち上がる。	体部外面へラケズリ。口縁 部内外面から内面にかけて ヨコナデ整形。	明るい橙色 砂粒含有 焼成良好
024H	坏	器高 (3.2) 口径(10.8)	弓残存。 底部は脣曲し、口縁部は内 傾ぎみに立ち上がる。内面 底部は平坦。	外面底部へラケズリ。口縁 部内外面ヨコナデ。内面底 部ユビナデ。	明るい橙色 砂粒少量含有 焼成良好
025H	坏	口径(11.1)	弓残存。 底部から口縁部にかけて屈 曲して脣曲し、口縁部は直 立ぎみ。	外面底部へラケズリ。内面 ユビナデ。口縁部内外ユビ ナデ。	茶褐色 砂粒少量含有、粘土微 密
026H	坏	器高 3.7 口径 12.1	完形。 底部は脣曲し、ゆるやかに 口縁部にいたり、端部はや や内傾気味に立つ。	外面底部へラケズリ。内面 底部ユビナデ。口縁部内外 面から内面にかけてヨコナ デ。	茶褐色 砂粒含有 内面一部に黒色(有機) 物付着
027H	坏	器高 3.9 口径 11.8	完形。 平坦ぎみの丸底底部から脣 曲して口縁部にいたり、口 縫部短く内傾。	外面底部へラケズリ。内面 底部ユビナデ。口縁部内外 面ヨコナデ。	明茶褐色 砂粒含有 焼成良好
028H	坏	器高 3.9 口径 11.7	弓残存。 底部から口縁部にかけて脣 曲し、口縁部はゆるく内傾 する。	外面底部へラケズリ。内面 底部ユビナデ。口縁部内外 から内面にかけてヨコナデ	明るい橙色 砂粒含有 焼成良好
029H	坏	器高 4.9 口径(13.6)	弓残存。 丸底の底部から脣曲して口 縁部にいたり、口唇部はゆ るく内傾する。	外面底部へラケズリ。口縁 部～内面ヨコナデ。	茶褐色 砂粒多量に含有 焼成良好
030H	坏	口径(15.0)	弓ほどの破片 脣曲して底部から口縁部に いたり、わずかに内脣気味 に立ち上がる。	外面底部へラケズリ。口縁 部～内面ヨコナデ。	明るい茶褐色 砂粒含有 焼成良好
031H	坏(大型)	器高 5.8 口径 17.1	完形。 底部から口縁部にかけて脣 曲し、口縁部は短く、わず かに内脣ぎみに直立する。	外面底部へラケズリ。内面 底部ユビナデ。口縁部ヨコ ナデ。	明るい茶褐色 砂粒微量含有 焼成良好
032H	坏(大型)	口径(19.6)	小破片。 脣曲した体部から口縁部に いたり、口縁部はやや内脣 する。	外面底部へラケズリ。口縁 部ヨコナデ。	明るい茶褐色 砂粒微量含有 焼成良好
033H	坏(盤)	器高 (3.5) 口径(19.0)	弓残存。 体部は浅く、ゆるく脣曲し わずかな棱をへて外反する 口縁部にいたる。	底部へラケズリ。内面中央 部ユビナデ。口縁部～内面 ヨコナデ。	暗茶褐色 砂粒少量含有 焼成良好

034S	环	器高 3.8 口径 10.6	写残存。 底部はゆるやかに彎曲し、 口縁部は外反して立つ。	底部は不定方向へラケズリ 口縁部から内面にかけてロ クロ左回転によるヨコナデ	灰青色 砂粒含有 焼成良好、堅緻
035S	瓶	口径 8.2	口頭のみ完存。 ゆるく外方に開いて立ち上 がる。中央部に2条の凹縫 がめぐる。	右回転ロクロのヨコナデ整 形。	灰色 砂粒含有 焼成良好、堅緻
036S	広 口 壺	口径(14.7)	口縁部破片。 外彎ぎみに大きく聞く。外 面の口縁端付近に凸縫の棱 がめぐる。	ロクロによるヨコナデ整形	白色 細砂微量含有
037S	平 瓶	胴径 10.9	体部写残存。 底部平底であるが全体的に 球形のなごりがみられる。	底部へラケズリ。体部内外 面、ロクロ左回転ヨコナデ	青灰白色 砂粒微量含有 焼成良好堅緻 肩部に薄灰自然釉
038S	鉢	口径(14.0)	底部欠損。 体部はゆるく外彎し、しだ いに厚みを減じて口縁部に いたる。	ロクロヨコナデ整形。	器面は青灰色、内面は くすんだ褐色 胎土密 焼成堅緻 内外面に少量の降灰
039H	甕	口径 23.2 胴径 16.4	底部欠損。 ふくらみのない長胴の体部 に逆八の字状の外反する口 縁部がつく。	体部↑方向へラケズリ。口 縁部ヨコナデ。	
040H	甕	口径(21.0)	体部下半部欠損。 胴部は外彎し、口縁部は外 反する。		
041H	甕	口径(16.8)	体部下半部欠損。 弱く外彎する体部に外反す るやや肥厚な口縁部がつく。		

### 9 号 住 居

遺物番号	器 形	法 量	器 形 の 特 徴	成形技術の特徴	備 考
042H	高 台 付 檻	器高 6.0 口径(13.6) 底径 7.6	体部の%欠損。 外反した高くしっかりした 高台部から、外彎した深め の体部となり、弱く外反す る口縁部にいたる。	はり付け高台。口縁部内面 ～外面ヨコナデ整形。体部 内面ケンマ。 器肉がうすく、つくりがて いねいである。	赤褐色、部分的に黒色 細砂粒含有 焼成良好、堅緻
043H	高 台 付 檻	器高 5.4 口径(16.2) 底径 8.2	体部の%欠損。 直線的に大きく聞く高台部 から外彎する浅く大きく聞く 体部が出て、外反し肥厚 した口縁部にいたる。	付け高台。 右回転ロクロによるヨコナ デ整形。	淡褐色 砂粒や多量に含有 焼成ふつう、やや軟質
044H	高 台 付 檻	器高 5.1 口径(14.0) 底径 5.5	体部の%欠損。 やや太い高台部から外彎す る体部が出て、外反する口 縁部にいたる。	付け高台。 比較的ていねいなヨコナデ 整形。	淡褐色 胎土緻密 焼成ふつう

045H	高台付楕	器高 (5.0) 口径 (14.0) 底径 (7.8)	体部の約及び高台下端部欠損。 高台は太く、短かいものとみられる。体部の外臂は弱く、直線気味に口縁部にいたる。	付け高台。 右回転ヨコナデ整形。	暗い橙色 胎土、砂粒多く粗雑 焼成不良
046S	高台付楕	底径 (7.8)	高台部、体部下半部の破片。 小ぶりで外臂ぎみに開く高台に外臂する体部がつく。	付け高台。 ヨコナデ整形。	青灰色 胎土や細密 焼成ふつう
047H	楕(小型)	器高 3.0 口径 (9.2) 底径 (4.3)	約残存。 底部は平底で、体部は外臂して立ち、口縁部は弱く外反する。	底部へラケズリ。 体部内外面ヨコナデ整形。	暗褐色 砂粒多量に含む。 焼成やや不良
048H	楕(小型)	器高 2.4 口径 (10.4) 底径 (5.5)	約ほどの破片。 平坦な底部から体部が出て大きく外反する口縁部にいたる。	底部は回転へラケズリ。 体部内外面ヨコナデ整形。	淡茶褐色 砂粒少量含有 やや堅硬
049H	楕(小型)	器高 2.7 口径 (10.0) 底径 (4.3)	約ほどの破片。 平坦な底部から外臂する体部となり、やや外反ぎみの口縁部にいたる。	内外面ともヨコナデ整形。	淡い橙色 砂粒やや多 焼成ふつう
050H	楕(小型)	器高 3.2 口径 (10.0) 底径 (4.0)	約ほどの破片。 平坦な底部から直線的に体部がのび、外面の棱をへて断面三角形状の口縁部にいたる。	体部外面及び底部へラケズリ口縁部~内面ヨコナデ整形	明茶褐色 胎土細密 焼成やや良
051H	羽釜	口径 (13.7)	体部上半部約残存。 やや強く骨曲した体部から内傾した口縁部へといたる口縁端部は平坦。羽は断面三角形状で端部はやや上向く。	体部上半部はヨコナデ整形 体部下半部はヘラケズリ整形か。	赤褐色 胎土や細密 焼成ふつう
052H	羽釜	口径 (21.0)	約残片。 体部上半部は垂直ぎみに立ち、口縁部にいたる。体部下半部はしりすばみに傾をちぢめ、平らな底部となる。羽は台形状で下がりぎみ。	体部上半部ヨコナデ。 体部下半部はヘラケズリ。	明るい茶褐色 砂粒含有 やや堅硬

#### 10号住居

遺物番号	器形	法量	器形の特徴	成整形技法の特徴	備考
056S	环	器高 4.0 口径 14.6 底径 7.8	約~約残存。 やや上反りの厚い底部からわずかに外臂する口縁部が立つ。	底部右回転糸切り。 内外面共ヨコナデ整形。	青灰色、部分的に褐色 胎土緻密 焼成良好
057S	环	器高 3.0 口径 16.5 底径 7.0	約残存。 上反りの底部から、外臂して立ち上がる口縁部にいたる	底部右回転糸切り。 内外面共ヨコナデ整形。	青灰色 胎土緻密 焼成良好堅硬

058S	环	口径(13.4)	体部と口縁部の小破片。 体部～口縁部弱く外脣。	体部内外面ヨコナデ整形。	暗茶褐色 胎土緻密 焼成やや不良
059S	蓋	器高(2.6) 口径(16.2)	少ほどの残片。 平坦な天井からゆるやかに外方に下り、水平ぎみになつて屈曲し端部にいたる。	体部外面上半部右回転ヘラケズリ。体部外面下半部～内面ヨコナデ。	灰白色 胎土緻密 焼成やや良

### 11号住居

遺物番号	器 形	法 量	器 形 の 特 徴	成整形技法の特徴	備 考
061H	皿	器高 2.2 口径(10.8) 底径 5.3	少残。 平底の底部からゆるやかに脣曲して口縁部にいたる。	底部右回転糸切り。 体部はヨコナデ整形。	暗褐色 胎土砂粒多くやや粗雑 焼成ふつ
062H	环	器高 2.7 口径(9.6) 底径 5.0	口縁部少欠損。 やや上反りの底部から脣曲した口縁部が立ち上がる。	底部右回転糸切り。 体部はヨコナデ整形。	明るい赤褐色 胎土やや粗 焼成やや不良
063H	环	器高 2.4 口径 10.3 底径 (5.3)	少残。 062Hに同様。	底部右回転糸切り。 体部ヨコナデ整形。	やや淡い褐色
064H	椀(小型)		少残。 わずか上反りぎみの小さい底部から外脣した体部が立ち、器肉を導めて外反する口縁部がひらく。	底部右回転糸切り。 体部ヨコナデ整形。	淡褐色 胎土緻密 焼成やや良好
065H	椀(小型)	底径(4.5)	体部のみ少残。 064Hに同様。	底部右回転糸切り。 体部ヨコナデ整形。	やや黒すんだ褐色 胎土緻密 焼成やや良好
066K	(高台付皿)	底径(7.3)	高台部破片。 平底の底部からゆるやかに体部がひくる。高台は体部下部につき、外側に開く小さなものである。	底部回転糸切り。 整形はヨコナデ。 はり付け高台。	灰白色 胎土緻密 硬質
067K	(高台付椀)	底径(8.1)	高台部破片。 わずかに脣曲する底部から外脣する体部に移行する。高台はやや太くしっかりしている。	付け高台。 整形はヨコナデ。 重ね焼きの痕跡あり。	灰白色 胎土緻密 硬質
068H	高 台 付 椿	器高 5.9 口径 14.0 底径 7.5	完形。 高台は高めでやや外反する体部は強く脣曲し口縁部は外反する。	付け高台。 内面ケンマ。外面はヨコナデ整形(右回転)。 内面黒色処理。	内面黒色、外側橙色 砂少量含有、緻密 焼成やや良好
069H	高 台 付 椿	口径(13.8)	体部少～無残。 体部はやや強く脣曲して立ち、口縁部は弱く外反する。	ロクロ左回転ヨコナデによる整形。	褐色ぎみの白色 胎土、砂がやや多く雜 焼成やや不良
070H	小 蓋	口径(13.2)	体部小破片。 外脣する体部から外反する口縁部にいたる。口唇部は断面三角形状を呈す。	体部内外面ヨコナデ。	赤褐色 胎土やや緻密 焼成やや良好

071H	羽釜	口径(19.2)	小破片。 体部は直線的。口はやや太 めで短かく、端部は丸い。	ヨコナデ整形。	外面淡褐色、内面黒褐色 砂粒含有
072H	羽釜	口径(21.0)	小破片。 体部は外脣し、口縁部はや や内傾する。 口は薄く長め。	ヨコナデ整形。	黒褐色 砂粒含有 須忠器とともにみられる

### 12号住居

遺物番号	器形	法量	器形の特徴	成整形技法の特徴	備考
075H	皿	器高(17.0) 口径(10.6) 底径 5.0	口縁部右欠損。 やや上反りの底部からゆる く屈曲して口縁部が開く。	底部右回転糸切り。 体部ヨコナデ整形。	淡い赤褐色 胎土、砂粒多くやや雜
076H	楕	器高 3.2 口径 10.2 底径 4.5	完形。 わずかに上反りする小さい 底部から、体部外脣し、口 縁部は外反する。	底部、右回転糸切り。 体部はヨコナデ整形。	赤褐色 砂粒含有 焼成やや不良
077H	环	器高 3.1 口径 9.7 底径 4.9	完形。 平底の底部から外脣気味に 口縁部が立つ。	底部糸切痕あり。 体部ヨコナデ整形。	赤褐色 砂粒やや多く含有 焼成やや不良
078H	高台付楕	器高 6.4 口径 14.1 底径 8.4	肩残存。 高台は高く外方に開く。底 部は平坦で、強く彎曲する 体部がつづき、口縁部は直 立ぎみで先端は細くなる。	付け高台。 ヨコナデ整形(右回転)。	淡褐色 胎土ふつう 焼成やや良好

### 13号住居

遺物番号	器形	法量	器形の特徴	成整形技法の特徴	備考
082H	环	口径(14.4)	底部へ口縁部の小破片。 平底の底部から腰をへて、 やや強く彎曲する口縁部に いたり、直立ぎみに立つ。	外面底部へラケズリ。 口縁部から内面にかけてヨ コナデ整形。	橙色 砂粒を含むが、胎土、 焼成共ふつう カマド出土
083H	环	口径(22.0)	口縁部小破片。 ゆるやかに外脣して体部か ら口縁部に移行する。	外面底部へラケズリ。 口縁部から内面にかけてヨ コナデ整形。	茶褐色 砂粒を少量含むが胎土 密 焼成やや良好 カマド出土

### 14号住居

遺物番号	器形	法量	器形の特徴	成整形技法の特徴	備考
084S	高台付楕	底径 7.2	体部上半欠損。 高台は低く、小さく外方に ふんばる。底部は平底。	底部右回転糸切り。 つけ高台。 体部はヨコナデ整形。	青灰色 胎土緻密 焼成やや良好

## 16号住居

遺物番号	器 形	法 量	器 形 の 特 徴	成整形技法の特徴	備 考
087H	椀	器高 3.8 口径(11.4) 底径 (5.8)	弓残片。 平底の底部から直線的な11 縁部がのびる。	底部へラケズリ。 内面底部ユビナデ。他はヨ コナデ整形。	橙色 砂粒多く、粘土や雜 焼成や不良
088H	椀	器高 3.8 口径(10.8) 底径 (3.8)	弓残片。 やや上反りする小さい底部 から外唇する体部へうつり 11縁部は外反する。	底部回転系切り。 体部ヨコナデ整形。	外面淡褐色、底部と内 面黒褐色 粘土やや雜 焼成や不良
089H	椀	器高 3.4 口径 11.2 底径 5.5	完形。 底部はほぼ平坦。体部は開 いて屈曲し、直線的に上外 方にのびる。端部は丸い。	底部は右回転系切り。 体部はヨコナデ整形。	少し褐色をおびた白色 粘土やや微密 焼成ふつう
091H	羽 盖	口径(23.2)	11縁部破片。 体部は厚手で垂直に上にの びる。 羽は断面台形状。	右回転ヨコナデ整形。体部 下半部はヘラケズリ。	淡赤褐色 砂粒多く、粘土や雜 焼成ふつう
092H	羽 盖	口径(21.3)	11縁部破片。 体部は薄手で外唇気味。11 縁部は直線的。羽はやや長 く先端は細い。	ヨコナデ整形。	淡褐色 粘土微密 焼成ふつう

## 17号住居

遺物番号	器 形	法 量	器 形 の 特 徴	成整形技法の特徴	備 考
093H	环	口径(12.0)	11縁部破片。 丸底とみられる底部から、 ゆるく彎曲し、11縁部は小 さく立つ。	底部へラケズリ。 11縁部~内面ヨコナデ。	橙色 砂粒含有 焼成や良好
094H	甕	口径(20.7) 胸径(19.8)	3個ほどの破片(体部下半部 欠損)。 体部は薄手で外唇し、11縁 部はやや強く内唇する。	11縁部内外面ヨコナデ。体 部外縁へラケズリ、内面ユ ビナデ。	橙色 粘土微密、細砂粒少量 含有 焼成や良好

## 18号住居

遺物番号	器 形	法 量	器 形 の 特 徴	成整形技法の特徴	備 考
095H	环	口径(16.2)	小破片。 丸底の底部はゆるく彎曲し 11縁部は屈曲して内傾する	外面底部へラケズリ。11縁 部~内面ヨコナデ。	淡褐色 細砂粒少量含有 焼成や良好
096H	环	器高 3.6 口径 10.3	完形。 ゆるい丸みの底部はしだい に彎曲を強め、11縁部は少 し内側に屈曲する。	外面底部へラケズリ。 11縁部~内面ヨコナデ。 内面底部ユビナデ。	赤褐色、底部黒褐色 細砂粒含有 粘土焼成ふつう
097S	蓋	器高 (天井まで) 2.6 口径 10.0	弓残存。つまみ欠損。 天井部はやや強く彎曲し、 11縁部にいたる。端部から 3mmのところでかえりがつ く。	ロクロ右回転ヨコナデ整形	暗青灰色 粘土微密 焼成堅致

098H	甕	器高(32.0) 口径 21.8 胸径 27.6	底部を一部欠損するが、ほぼ完形。 胴部はややたて長の球形で 口縁部はやや屈曲したつくりで外反している。	口縁部内外ヨコナデ。体部 外面上半部へ方向へラケズ り、同下半部へ方向へラケ ズリ。体部内面ナデ。	やや黒ずんだ褐色 砂粒含有 焼成ふつう
------	---	--------------------------------	---	--	---------------------------

### 19号住居

遺物番号	器 形	法 量	器 形 の 特 徴	成整形技法の特徴	備 考
099H	环	器高 2.9 口径(12.6)	小破片。 平坦な底部から強く屈曲して口縁部が立ち上がる。口縁部には段がある。	器肉は薄手である。底部へラケズリ。体部はヨコナデ整形。	赤褐色 砂粒を少量含有するが 胎土緻密 やや軟質
100H	环	器高 2.4 口径 (9.8)	円~3/4の破片。 平坦な底部から一担外脣して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部下半~底部へラケズリ。口縁部上半部~内面ヨコナデ。	茶褐色 砂粒少量含有 焼成ふつう
101S	环	器高 3.7 口径(13.8) 底径 (7.8)	円~3/4の破片。 平底の底部から外脣して立ち上がり、口縁部は器肉を薄めてやや外反する。	底部は回転糸切り。 整形はヨコナデ。	外面青灰色、他は白色 胎土緻密 やや軟質
102S	环	器高 3.7 口径 12.8 底径 6.4	口縁部一部欠損。 上反する底部から外脣ぎみに立ち上がり。口縁部はわずかに外反ぎみである。	底部右回転糸切り。 整形はヨコナデ。	灰白色 胎土緻密 やや堅緻
103S	蓋	器高 (2.6) 口径(17.2)	円~3/4の破片。 天井部は下反りぎみで、ゆるやかに下外方ににつづき、水平化して丸い端部にいたる(端部は丸みを呈していないが、本来は垂直の形のものとみられる)。 つまみのない蓋である。	天井部回転糸切り。 体部上半部へラケズリ。 体部下半部~内面ヨコナデ調整(右回転)。	青灰色 砂粒少量含有 やや堅緻
104S	蓋	器高 3.8 口径 16.5 ツマミ径 5.0	口縁部一部欠損。 つまみは円錐状。天井内部は水平。体部内脣ぎみに下り、水平化して端部は短く直に下る。	外部天井部へラケズリ。天井内部ユビナデ痕をのこす 整形はヨコナデ(右回転)。	茶褐色 砂粒含むが緻密 焼成ふつう(酸化炎焼成か)。
105S	楕	口径(16.0)	口縁部小破片。 ゆるやかに外脣して底部から体部に移行し、器肉をうすめて長く外反する口縁部となる。	ヨコナデ整形。	灰白色 胎土緻密 やや堅緻
106S	高 台 付 楕	底径 7.5	口縁部欠損。 高台は短い。体部は外脣して立ち上がる。	底部右回転糸切り。付け高台。 整形はヨコナデ。	器面黒褐色 細砂含有、胎土緻密 やや堅緻
107K	小 瓶	口径 (4.6)	頸部円~3/4の破片。 頸部は強く外脣し、口縁部水平ぎみで、端部は丸い。	整形はロクロ回転によるヨコナデ整形。	灰白色 胎土緻密 堅緻

108H	甕	口径(18.0)	口縁部破片。 外唇する体部から頸部直立し、口縁部近く外方に開く。	口縁部内外面右回転ヨコナデ。体部外面→方向へラケズリ。内面ヘラナデ。	赤褐色 粘土緻密 焼成ふつう
109H	甕	口径(14.2)	口縁部破片。 108Hに同じ。	108Hに同じ。	黒みをおびた褐色 粘土緻密

## 20号住居

遺物番号	器 形	法 量	器 形 の 特 殊	成整形技法の特徴	備 考
111K	高台付塊	底径 7.0	底部残存。 底部下反し、彎曲した体部へ移行。 高台は短い台形状。	付け高台。 整形はヨコナデ。 施釉は滑掛けとみられる。	灰白色 焼成やや不良 やや軟質
112H	皿	器高 2.2 口径 9.8 底径 6.2	口縁部一部欠損。 底部平底。口縁部は外唇し たあと外反する。	底部回転ヘラケズリ。 口縁部~内面ヨコナデ。 ロクロは右回転。	茶褐色 粘土やや緻密 焼成やや良好

## 21号住居

遺物番号	器 形	法 量	器 形 の 特 殊	成整形技法の特徴	備 考
115H	(椀)	底径 5.0	底部残存。 底部平底で、彎曲して体部へ移行する。 器形は椀か皿かのいずれか 断定しえない。	底部は右回転糸切り。 内面底部ユビナデ残存。 体部ヨコナデ整形。	黒灰色 粘土やや緻密 焼成やや不良
116H	高台付椀	底径 (6.7) 高台径 (8.1)	高台は長く外へへんばる。 体部は彎曲してやや急に立ち上がる。	付け高台。 高台部と体部の整形はヨコナデ。ただし、底部上下面 はユビナデか。	赤褐色 砂粒含有 焼成やや良好
117K	高台付皿	器高 2.9 口径 13.6 底径 6.6	殆どどの残片。 底部から体部にかけてゆるく外唇し、口縁部やや外反ぎみ。 高台は低く、丸みをおびる。	底部右回転糸切り。 施釉は滑掛け。	灰白色 粘土緻密 堅緻
119S	羽 盖	口径(23.2)	口縁部破片。 口縁部は垂直。端部外斜。 羽は断面三角形状でやや長め。	ヨコナデ整形。	灰白色 砂粒多量に含有 焼成やや不良

## 22号住居

遺物番号	器 形	法 量	器 形 の 特 殊	成整形技法の特徴	備 考
121K	高台付椀	底径 (8.8)	底部残存。 高台はやや長い。 体部はやや強く彎曲。	付け高台。 整形はヨコナデ。 施釉は滑掛けか。	灰色 粘土緻密 やや堅緻

## 25号住居

遺物番号	器 形	法 量	器 形 の 特 徴	成整形技法の特徴	備 考
122S	高 台 付 梵	器高 5.1 口徑 13.6 ~14.5 底径 7.0	完形。 高台は底く、底部は小さい が、体部は大きく開き、口 縁部は器肉をうすめてやや 外反する。	底部右回転系切り痕あり。 付け高台。 体部はヨコナデ整形。	青灰色 砂多く、粘土堆 成やや不良
123S	カ メ	胴径 21.6	底部と体部上半部を欠損。 長胴形の体部であって、底 部は平底のいわゆる瓶とお もわれる器型を呈する。	輪積み、ヨコナデ整形。	青黒色 細砂含有 焼成やや良好

## 26号住居

遺物番号	器 形	法 量	器 形 の 特 徴	成整形技法の特徴	備 考
124H	环	口徑(10.1)	口縁部破片。 底部から口縁部の境で棱をな す。底部はゆるく彎曲し、 口縁部は外反する。	底部へラケズリ。 口縁部内外面ヨコナデ。	淡い赤褐色 粘土密 焼成やや良好
125H	环		口縁部破片。 底部から口縁部まで彎曲し 口縁部や内傾ぎみ。	外面底部へラケズリ。口縁 部から内面にかけてヨコナ デ整形。	淡い橙色 砂粒含有、粘土やや密 焼成ふつう
126S	环	口徑(12.7) 底径(10.6)	片などの破片。 底部中央部付近器肉厚く、 やや外唇気味。口縁部の立 ち上がりはかなり急であ る。	口縁部から底部にかけてヨ コナデ。底部は内外面とも 静止へラ調整か。	青灰色 砂粒少量含有 焼成良好、堅緻
127S	壺	口徑(16.4)	口縁破片。 やや外反ぎみに開く口頭部 である。端部から1cmのところに棱がつく。	横ナデ整形。	灰白色 粘土緻密 焼成堅緻
128H	壺	口徑(19.4)	口縁部破片。 胴部は直立ぎみ。口縁部は 厚みを増して外反し、端部 は丸い。	口縁部内外ヨコナデ。胴上 半外側へ方向へラケズリ か。また内面ユビナデか。	

## 27号住居

遺物番号	器 形	法 量	器 形 の 特 徴	成整形技法の特徴	備 考
129H	环	口徑(12.6)	底部ゆるやかに彎曲し、口 縁部はやや急に立つ。 片などの破片。	口縁部下半部へ底部へラケ ズリ。口縁部ヨコナデ。内 面底部ユビナデ。	褐色 粘土や緻密 焼成ふつう
130H	甕	口徑(11.6) 頭部径 (9.8)	口頭部破片。 口頭部はやや強く内脣する 形である。	ヨコナデ整形。	茶褐色 粘土や緻密 焼成ふつう

## 28号住居

遺物番号	器 形	法 量	器 形 の 特 徴	成整形技法の特徴	備 考
131H	碗	器高 2.9 口径(10.0)	円弧の破片。 平底の底部から一扭外反し 器肉をまして口縁部にいた る。	底部の整形は不明。 口縁部内外面ヨコナデ。内 面底部ユビナデ。	赤褐色 砂粒含有 焼成やや不良
132K	長 頸 瓶	口径 5.9	頸部のみ残存。 頸部は直立気味で、上部に いたり外反する。口縁端部 は外斜している。	頸は自然陥伏によるものと みられる。	灰色 胎土緻密 堅微

## 30号住居

遺物番号	器 形	法 量	器 形 の 特 徴	成整形技法の特徴	備 考
136H	甕	口径(20.0)	口頭部円残。 口頭部はコの字状。頭部は 直立し、口縁部は外反する 口縁端部に凹線をめぐらす	口縁部はヨコナデ整形。 体部外面はヘラケズリ。	淡い赤褐色 砂粒含有、胎土や緻 密 焼成やや良好
137H	台 付 甕	胸径 15.0	台部と体部上半部を欠損。 胴下半部はしりぞみで、 台接合部の径は小さい。	胴下半部は↓方向ヘラケズ リ。内面はヘラナデ。	黒ずんだ褐色 胎土緻密 焼成やや良好

## 31号住居

遺物番号	器 形	法 量	器 形 の 特 徴	成整形技法の特徴	備 考
139H	甕	口径(19.7)	胴上半部以上の円残存。 ゆるく彎曲する長胴の体部 に外反する口縁部がつく。	口縁部ヨコナデ。 胴部外面ヘラケズリ。内面 ヘラナデ。	淡い橙色 胎土、焼成ふつう

## B地点Bトレンチ

遺物番号	器 形	法 量	器 形 の 特 徴	成整形技法の特徴	備 考
155S	台 付 皿	器高 2.5 口径 9.5 底径 6.2	口頭部円はどうぞ損。 高台は高く、外方に開く。 盤部は器肉が厚く、ほぼ水 平で受身はない。	内外面ともロクロ横ナデ整 形(右回転)。	灰白色 細砂粒を多量に含む やや軟質
156H	台 付 梵	器高 3.9 口径 10.5 底径 6.1	円弧片。 外反する台部から立ち上がり、 口縁部は器肉をうすめ て外反する。	内外面ともロクロ横ナデ整 形。 盤部は右回転糸切り後、高 台を付す。	灰白色 砂粒を多量に含む 軟質 器面荒れている
157H	环	器高 2.6 口径 10.2 底径 4.7	完形。 体部彎曲しながら立ち、口 唇部短く直立する。	底部右回転糸切り。 内外面共ヨコナデ整形。	赤褐色 砂粒少量含有 焼成良好 外面に「正」の墨書き あり。
158H	台 付 梵	器高 5.4 口径 12.6 底径 7.3	口縁部円欠損。 厚肉でぱってりしたつくり。 高台は内彎ぎみ。底部は水 平で、体部はやや急に彎曲 して立ち、口縁部は器肉を うすめて少し外反する。	付け高台。 内面底部ユビナデ。口縁部 ～外面ヨコナデ。	淡い赤褐色 砂粒含有 やや軟質

## C地点Dトレンチ

遺物番号	器 形	法 量	器 形 の 特 徴	成整形技法の特徴	備 考
167S	杯	器高 3.5 口径 13.2 底径 6.7	肩残存。 平川な底部から外付して立ち上がり、口縁部で外反する。端部は丸い。	底部回転系切り。 内外面ヨコナギ。	赤褐色 砂粒少量含有 施成良好

図 版 1



A地点 北西より



A地点遺構全景 北より

図 版 2



5号住居 西より



6号住居（右）及び20号住居（左） 西より

図 版 3

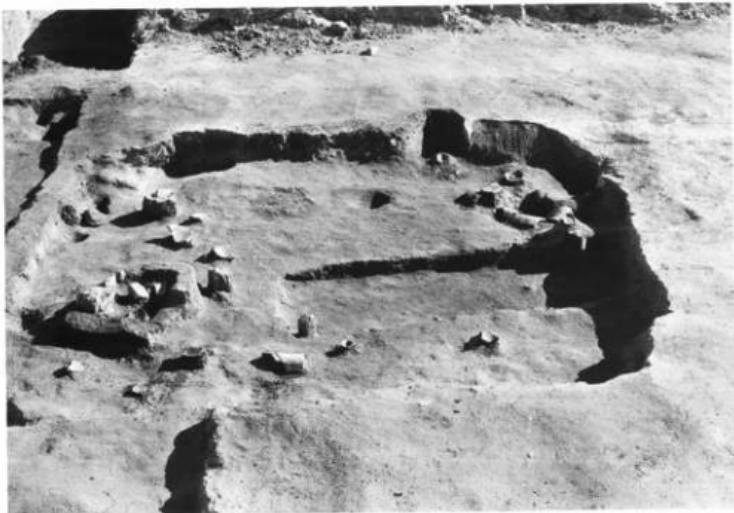


7号住居 西より



12A・12B号住居 北より

図版 4



19号住居 西より



6号住居カマド 西より

図 版 5



7号住居カマド 西より



13号住居カマド 西より

図 版 6



20号住居カマド（石、瓦除去前） 西より



20号住居カマド（石、瓦除去後）



19号住居遺物出土状態 西より



21号住居遺物出土状態 北西より

図 版 8

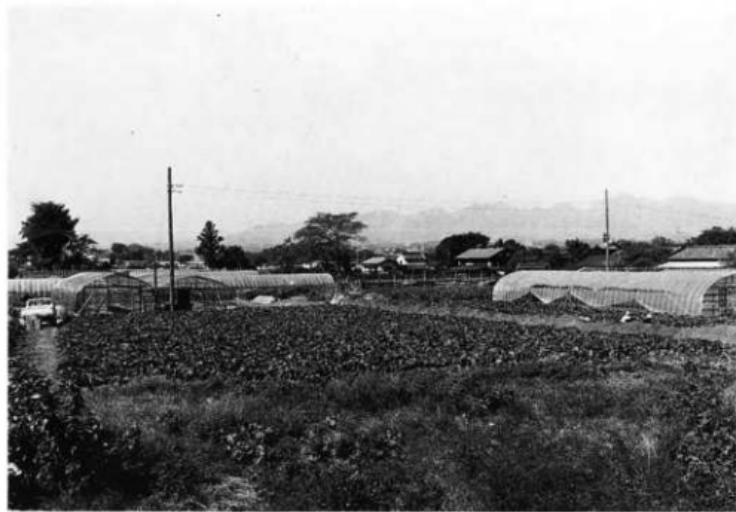


28号住居 貯蔵穴付近遺物出土状態 北より



掘立柱建築遺構 西より

図 版 9



B地点 南東より（遠望は榛名山）



C地点 南西より（正面の木立は七重塔跡）

図 版 10

2号住居



004-H

5号住居



009-H



012



013-H

3号住居



008-S

6号住居



014-S



018-S

7号住居



026-H



027-H



028-H



034-S



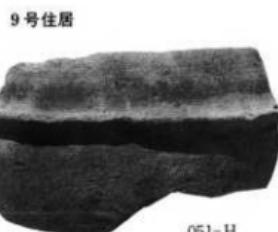
035-S



037-S



039-H



051-H



052-H



042-H



053



043-H



054



055

図 版 12

10号住居



056-S

11号住居



061-H



064-H



071-H



068-H



073



072-H

12号住居



075-H



078-H



077-H



076-H



081



079



080

图 版 13

16号住居



089-H



091-H



092-H

17号住居



094-H

18号住居



096-H

19号住居



102-S



109-H



106-S



104-S



110

图 版 14

20号住居



112-H



113

21号住居



117-K



118



120

25号住居



122-S

28号住居



132-K



123-S



135



133

图 版 15

30号住居



A地点 2号溝



141

140

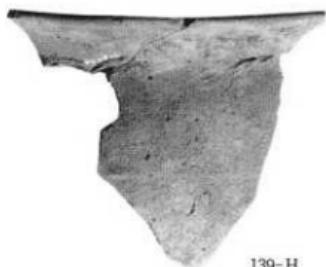


142



143

31号住居

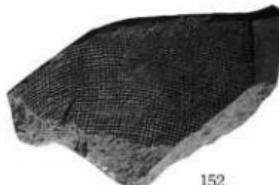


139-H

A地点 4号溝



A地点内



152

图 版 16

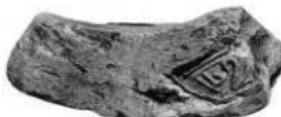
A地点内



154



153



150



146



151



144

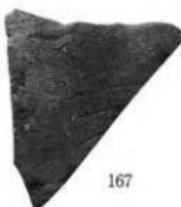
図 版 17



149



145



167

B地点内



155-S



156-H



158-H



157-H



163



161



162



159



165



160

D地点 1号溝



172



171



177

D地点 2号溝



173



174



176

銅 錢



A-A



A-C



B-B



D-1号溝



---

上野国分寺隣接地域発掘調査報告  
奈良平安時代の堅穴住居跡等の調査

昭和54年3月30日 印刷  
昭和54年3月31日 発行

編集・発行 群馬県教育委員会文化財保護課  
印 刷 朝日印刷工業株式会社

---